

# 朝河貫一とマルク・ブロックの往復書簡 —戦間期における二人の比較史家—

向井伸哉、斎藤史朗、佐藤雄基

## 解題

### 1、はじめに

近代歴史学における比較史の道具立ての一つに、封建制 (feudalism) 概念がある。封建制概念とは本来、西欧中世の政治・社会制度史上のものであったが、西欧を基準とした歴史分析・記述が非西欧世界で採用される過程において、その適用可能性が論じられるようになった。特に日本史における封建制概念の導入は、feudalism の訳語となった漢語「封建」のもつ江戸期以来の含意とも混同されつつ、近代歴史学における論点の一つとなった<sup>(1)</sup>。一方、ヨーロッパの側においても、非西欧世界の歴史への認識が深まるなかで、自らの歴史像が、普遍的なものであるのか、あるいは特殊西欧的なものであるのか、という問題意識が生じ、同概念の有効性とその限界が議論された<sup>(2)</sup>。しかしながら、封建制概念が論者によって定義ないしイメージを異にしたことは、その便宜的な利用と無批判な適用が広がる要因となった。近年では、西欧中世社会における封建制の重要性や9-11世紀におけるその存在自体への懐疑論が一つの潮流をなし<sup>(3)</sup>、日本においては「封建制概念の放棄」が提唱されている<sup>(4)</sup>。封建制をめぐる議論が再び活発化しつつある現在、この概念を用いて近代の歴史家たちが何をどう論じようとしたのか、あらためて史学史的に再検討することには大きな意味があるように思われる<sup>(5)</sup>。

比較史の史学史を考える際、英語圏の日本史研究・比較封建制論の先駆者となった朝河貫一 (1873-1948) と、比較という視点から独自の封建社会論を構想したフランスの歴史家マルク・ブロック (Marc Bloch, 1886-1944) という二人の比較史家の交流は興味深い。

朝河は1895年に単身渡米し、イエール大学において博士号を取得し、同大で長く教鞭をとった<sup>(6)</sup>。主著は、日本封建制論に関する古文書を英訳し、詳細な注釈を付した1929年刊行の『入来文書』 (*The Documents of Iriki*) である。これは、日本封建制の一次史料を英訳し、日本学を専門としない欧米の研究者の便に供した点で画期的なものであり、マルク・ブロックら欧米の歴史家に評価されたことでも知られている。一方、ブロックは、1929年リュシアン・フェヴル (Lucien Febvre, 1878-1956) とともにアナル (Annales) 学派を創始し、歴史社会の構造分析のための「社会史」を提唱したことで知られる。1919年ストラスブール大学文学部中世史講座に着任

し、36年パリ大学文学部（ソルボンヌ）経済史講座教授に転ずるが、第二次世界大戦勃発後に出征の途につき、フランス降伏の後もレジスタンス活動を続け、故郷リヨンにてドイツ軍に捕縛、銃殺された<sup>(7)</sup>。

朝河貫一とマルク・ブロックとの交流について、先行研究では、朝河の著書『入来文書』（1929年）がブロックに高く評価されたこと、『アナル』誌（1929年創刊）に朝河が書評・研究動向論文を2本寄稿したこと、などの事実関係が指摘されてきた<sup>(8)</sup>。だが、両者の交流が、互いの封建制論にいかなる影響を与えたのか、エピソードにとどまらない内在的検討が必要であるように思われる<sup>(9)</sup>。そこで朝河とブロックの往復書簡の存在が注目される。アメリカのJ. ハーヴェイが、両者の往復書簡を史料紹介し、初期アナルの編集者たちがヨーロッパの外部にも目を向けていたことを論じているが<sup>(10)</sup>、書簡の見落としがある上、両者の交流の内容を必ずしも全面的に検討したものではない。

そこで本稿では、往復書簡の詳細な復元と検討を通じて、両者の交流の実態を明らかにしたい。

## 2、朝河・ブロック往復書簡の所蔵状況

現存する往復書簡は次の3つの史料群に見出される。(a) イェール大学図書館所蔵朝河貫一文書<sup>(11)</sup>、(b) 福島県立図書館所蔵朝河貫一文書<sup>(12)</sup>、(c) フランスのコルマル市立図書館（Bibliothèque municipale de Colmar）所蔵ポール・ルイヨ（Paul Leuilliot, 1897-1987, アナル事務局長）文書<sup>(13)</sup>である。前2者は朝河の手に伝来したものであるが、最後のルイヨ文書はブロック側に伝来し、ハーヴェイによってその存在が紹介された。

往復書簡は本稿末尾の【表】にみるように全25通あり、その内訳はa：16通（朝河発信書簡控え7通、朝河受信書簡9通）、b：3通（全て朝河受信書簡）、c：9通（朝河発信書簡8通、内6通はaとbと重複しない）となる。年代の幅は1929年5月7日-1939年6月19日となるが、最後の一通は単独で存在し、やりとりとしてはi. 1929年、ii. 1930-32年、iii. 1934-35年の3グループに分けることができる（cのルイヨ文書伝来分は、朝河のアナル掲載に関わる第ii期分のみ）。

翻刻状況としては、ハーヴェイ論文が、aとcの翻刻を掲載しているが、bの福島県立図書館所蔵の書簡3通が見過ごされている。なお朝河貫一書簡集編集委員会編『朝河貫一書簡集』（早稲田大学出版部、1990年）は、イェール大学図書館所蔵分の朝河発信書簡のうち4通を載せている（【表】参考）。

本稿では、往復書簡の翻刻を掲載するとともに、その翻訳にかえて解説を加えていくことにしたい。

### 3、朝河・ブロック往復書簡の内容

#### ① 1929年5月7日付朝河書簡

最初に接近したのは朝河の側であった。朝河はブロックの「比較史的視点」に長年感服していたことを伝え、同年に出版されたばかりの『入来文書』を『アナル』の編集部に謹呈し、同誌上において紹介されることを求めている。また、封建制に関する論文「日本史における農業：一般的考察」（1929年1月）及び「初期の荘と初期のマナー：比較研究」（同年2月）の抜刷を同封している<sup>(14)</sup>。

朝河には自らを売り込む意図があったようである。主要関心は日本封建制であるが、イエール大学大学院でヨーロッパ封建制の演習を担当しており、日欧比較、さらにヨーロッパ内部の比較に関心をもつことを伝えるとともに、ストラスブール大学での半年あるいは一年の共同研究を行う可能性について打診している。なおストラスブールの住所をドイツとタイプしてしまったのは、第一次世界大戦期までドイツ領だったためのミスであろうか。

#### ② 1929年5月24日付ブロック書簡

①への返事。西欧内部の比較ではなく、日本と西欧の比較という視点の重要性について述べた上で、朝河の2本の論文について、すでに紹介記事を読み、J. シオンの著作<sup>(15)</sup>と同様に、ヨーロッパ農業の根幹を成す「耕地と牧場の組み合わせ」をヨーロッパ独自のものとして浮き彫りにしてくれる点に感銘を受けたほか、「ヨーロッパ人にとって、あまりに身近になっているがゆえに、全く当たり前になっていて、わざわざ説明しようともしなくなってしまう幾つかの大きな特徴の重要性に注意を喚起」された旨を述べている。

また、ストラスブール大学での朝河の受け入れを快諾しており、ストラスブールの研究環境（パリに次ぐ大学図書館の蔵書、ドイツ史についてはパリ以上の蔵書、リュシアン・フェーヴル、G. ルフェーヴル（Lefebvre）を擁する歴史学部門の充実ぶり）について返答した上で、朝河がストラスブールに来ることを歓迎する旨、その際には朝河に日本史あるいは日欧比較をテーマにした講座（*cours libre*）の担当を依頼したいという意向を伝えている。そして比較史に基づく論文の抜刷を同封し、「これ [=比較という手法] が我々の間のきずなです」と結んでいる。

#### ③ 1930年10月6日付ブロック書簡

ヴェカンスの間に『入来文書』を読んだ感想を朝河に伝えている。確かな方法論による比較史の試みとして称賛し、アナルで紹介することを約束した上で、「大名と *vassi dominici* について、同時に、史料から論じることを可能にする知識の多様さ」に瞠目した旨を伝えている。

ブロックは、朝河自身の研究と日本語で書かれた研究紹介という2点で、朝河にアナルへの協力を依頼している。「貴族」に関する共同研究や前近

代の日本の職能団体の組織に関する論文の寄稿を打診するほか、経済史や社会史、現代の経済や社会についての日本語で書かれた著作の書評の執筆を依頼している。さらに日本の現代経済社会などのテーマについて朝河の代わりとなる協力者を紹介するよう求めている。その理由として、アナルには日本研究者はいるものの、日本語のできる歴史家や経済学者がおらず、日本語で書かれた出版物に関する情報がフランスで欠如している現状への危惧を表明している。

追伸として、日本の統計刊行物の情報提供を依頼しつつ、朝河のストラスブル留学を待っている旨を記している。

④ 1930年11月20日付朝河書簡

③への返事。オットー・ヒンツェ (Otto Hintze, 1861-1940) や E. R. アヴォンド (Edoardo Ruffini Avondo, 1901-1983) による『入来文書』書評に注目している旨を述べつつ、ブロックが『入来文書』の書評を引き受けたことへの謝意を示した<sup>(16)</sup>。

アナルへの協力依頼に対しては、第一には、自分の研究は経済史ではなく制度史であり、近代の知識がないこと、第二には、イエール大学での教育と「南九州の封建体制」に関する著述の準備（特に司法的領域に関心）とに忙殺されて、時間的な余裕がないことを述べて、アナルへの協力が限定的なものになると返事している。書評対象となる出版物の送付方法、「社会史」(histoire sociale) の対象範囲について尋ねた上で、堺市編・三浦周行監修『堺市史』(1929-1931年)の書評を提案している。

なおストラスブル留学については、金銭的事情などを理由にして、態度を濁している。

⑤ 1930年12月5日付ブロック書簡

④への返事。書評用出版物の献本の方法についての事務連絡を行っている。書評対象となる「社会史」の範囲について、「純然たる政治史や法生活の細部に関する歴史は、書評対象から外してきましたが、一方で、法に関する研究や政治制度に関する研究でも、社会構造それ自体（諸階層、親族集団など）に光を投げかける場合には、我々が興味をもつこともありえます。たとえば、申し上げるまでもなく、『入来文書』は完全に我々の関心のうちに入ります」と述べ、協働作業の進捗によって「社会史」の範囲は自ずと定まるとした。さらに朝河の代わりに現代日本経済の書評を書く人物の推薦を依頼している。

追伸では、イエール大学出版局に注文した書籍が、同出版局のヨーロッパにおける代理店ハンフリー・ミルフォード社 (Humphrey Milford) のせいで届かないため、同出版局から直接アナルに郵送してもらえるよう朝河に依頼している。

⑥ 1931年1月8日付朝河書簡<sup>(17)</sup>

⑤への返事。献本の方法に関する事務連絡の他、スタンフォード大学の市橋俊にアナルへの協力を依頼する旨を伝え、また、イェール大学出版局からの返信を同封している。『堺市史』、竹越与三郎『日本経済史』（1920年）、瀧川政次郎『日本奴隷経済史』（1930年）の三冊の書評を送付し（朝河のアナル第1書評<sup>(18)</sup>）、「アメリカとヨーロッパの学術雑誌で、日本語の著作を紹介しようとするのはアナルが唯一である」と述べている。また、①で謹呈した2本の論文をブロックがアナル誌上で紹介したことに謝意を示している<sup>(19)</sup>。

また、次回以降書評の分量の基準を明示するように求めている。

## ⑦ 1931年1月23日付ブロック書簡

⑥への返事。書評原稿を受理した旨を伝え、その掲載方法について述べている。書評の分量について、各号で流動的なので基準は明示できなかつつ、「書評 (Courriers critiques)」欄のほかに、スペースの大きな「事実と方法の問題 (Questions de fait et de méthode)」欄でも文献紹介が可能であることを提案している。

## ⑧ 1931年2月8日付朝河書簡

⑦への返事。スタンフォード大学の市橋俊（経済）と東京帝国大学の高木八尺（社会）にアナルへの協力を依頼し<sup>(20)</sup>、高木は返事待ちであるが、市橋からは承諾の返事があったことを伝える。アナルは日本では入手困難なので、書評対象文献の著者たちへの書評抜刷送付を要求している。

## ⑨ 1931年3月28日付朝河書簡

2月17日付のブロック書簡（未確認、朝河書簡⑧への返事か）に対する朝河への返事である。書評の校正刷りを返却するとともに、アナルを刊行しているアルマン・コラン (Armand Colin) 社から、いったん朝河の許に送り、朝河から著者に抜刷を送るという方式にするように求め、市橋や高木についても（両名が書評を書き始めたならば）同様の方式をとることを勧めている。

なお、「証明書類の件についてコランに知らせる (Avertir Colin au sujet des justificatifs. 11/4/31)」とのフランス語の手書きのメモが書簡の冒頭に書き込まれており（翻刻には反映させず）、アナル側における事務処理の一端が伺える。

## ⑩ 1932年7月15日付朝河書簡

⑨から約1年4カ月ぶりとなるが、大学の仕事で忙殺されてしまっているため、書評の執筆を長い間怠っていたことを謝りつつ、セリグマン編『社会科学百科事典』にブロックが執筆した封建制の項目（西欧）<sup>(21)</sup>を読んだこ

とを伝え、アナールに寄稿する第2書評「日本の社会経済史における宗教の位置」<sup>(22)</sup>の原稿を同封している。また、昨年寄稿した書評の抜刷をアルマン・コラン社が送ってこないことに苦情を述べている。さらに市橋が実際にアナールに協力するかは疑わしいと述べ、日本におけるアナールへの協力者獲得についても難航している旨を伝えている。

⑪ 1932年7月24日付朝河書簡

アナールから朝河に送られてきた書評用献本の受領状である。朝河はA. アンドレアデス (Andreas Andréadès, 1876-1935) 著の *Les finances de l'empire japonais et leur évolution* (日本帝国の財政とその進展) および宮下幸吉 (K. Miyashita, 1900-1971) 著の *Beiträge zur japanischen Geldgeschichte* (日本貨幣史に関する概説) の2冊を受け取ったが、アンドレアデスの著作には関心がなく、今後は現代日本・経済関係の図書を自分に送付しないように伝えている。

⑫ 1932年8月1日付ブロック書簡

⑩への返事。ヴェカンスのため返事が遅れたことを謝りつつ、第2書評をフェーヴルと二人で読み、強い関心をもったので<sup>(23)</sup>、フランス語に翻訳した上で「全体的問題 (Problèmes d'ensemble)」の項目に掲載する旨を伝えている。また、論文抜刷25部の送付を約束している。さらに書評に留まらず「大きな比較の射程をもった論文」のアナールへの寄稿を求めている。

⑬ 1932年8月14日付朝河書簡

⑫への返事である。朝河自身もニューハンプシャー州のホワイト山脈の麓の農場で夏を過ごしており、ブロックから贈呈された『フランス農村史の基本性格』を読み、日本の学術雑誌にその著書の書評<sup>(24)</sup>を書くことを約束している。

アナールへの論文寄稿依頼に対して、自分の関心は制度史研究にあり、「社会史」を掲げるアナールに適するかどうか心配であるが、源頼朝の鎌倉幕府創設に関する制度史的の研究の投稿を提示している。「頼朝に関する問題は日本国民の全歴史において非常に重要な問題の一つであります。未だ日本の学者たちがこの問題を制度史的に扱ったことはありません。これは様々な意味で難しい問題です。比較の知識をもってこそその多様な側面を取り扱うことができます。日本の封建制がヨーロッパのものと相違する全ての理由は、まさにこの頼朝が創設した最初の政体の中に含まれているのです。」という自負を伝えている。

⑭ 1932年9月24日付ブロック書簡

⑬への返事。将軍制度に関する論文をフランス語の雑誌で発表することを勧めるものの、法制的・制度的すぎる内容なのでアナール以外の雑誌への寄

稿を勧めている<sup>(25)</sup>。リュシュアン・フェーヴルが編集を務めている *Revue de Synthèse*（総合雑誌）や別の知人が編集となっている *Revue Historique*（史学雑誌）や *Revue Historique de Droit*（法制史雑誌）などの名前を挙げ、自分が紹介者となることを約束している。この段階でもブロックは朝河にストラスブルでの共同研究を持ちかけている。

⑮ 1932年11月4日付ブロック書簡

第2書評の英文原稿をフランス語に翻訳したものを朝河に送り返し、翻訳原稿のチェックと修正要求を添えている。修正点としては書誌情報や年号の補足の他、日本史に疎い読者のために、神道と仏教の違い、日本史の概説的な文章を書くように求めている。

⑯ 1932年11月20日付朝河書簡

⑮に同封された第2書評のフランス語訳文のチェック済み原稿を返付している。日本語のフランス語式表記法（例えば、将軍は *shogun* か *shogoun* か、神道は *shinto* か *shinnto* か）に関するコメントを添えている。

⑭への返事として、論文「源頼朝による幕府の創建」<sup>(26)</sup>を掲載する予定のプラハ大学の紀要の出版状況が分からず、また、「南九州の封建体制」の執筆にも時間がとられていることを理由にして、返事の猶予を求めている（実質的には論文執筆の謝絶）。

⑰ 1934年11月23日付ブロック書簡

ブロックが監修者を務めることになったガリマル（Gallimard）社「農民と土地（*Le paysan et la terre*）」叢書での『日本の農民』の巻の執筆を朝河に依頼し、無理であれば、朝河の代わりとなる執筆者を紹介するよう求めている。ブロックの希望は、「日本の歴史全体にわたって農民層の動向が生き生きと叙述され、日本文明における農村の深層がしっかりと記述され、その変遷がヨーロッパにおけるそれとの比較により説明される、そして芸術や文学における表現と農民の現実との関係が明瞭に説明される巻」であった。

⑱ 1934年12月10日付朝河書簡

⑰の『日本の農民』の執筆依頼に対する返事。日本の農民生活史は派生的な関心対象であり、興味があることを伝えつつ、1919年に約束していた日本封建制の著書の執筆に着手できておらず、もう1冊の大作に割く時間はないとしつつも、きっぱり断り難いとして、締切期限や現代日本の農民に割くべき割合について尋ねている。

⑲ 1934年12月25日付ブロック書簡

⑱への返事。執筆依頼承諾への感謝を述べつつ、別の巻の締め切り期限が2年以内であることを例示し、執筆に必要な時間を尋ねている。『日本の農民』

執筆に際しては、人々のイメージと生活の現実の照応関係を示すため、豊富な図版（美術史料）を載せることを求め、現代には結論部で触れる程度でよいとしている。

⑳ 1935年1月21日付朝河書簡

⑱への返事。『日本の農民』執筆開始の時期は、日本封建制の著書執筆が進んでいないために確約できず、早くても4年後と返答している。

㉑ 1935年6月19日付ブロック書簡

⑳への返事。『日本の農民』執筆について朝河の承諾の明言化と執筆期間の明示を求め、拘束力を伴わない契約書を送付してよいか質問している。

㉒ 1935年8月18日付朝河書簡

㉑への返事。今後、4年間は『日本の農民』の執筆の準備ができず、執筆に2年は要するので、完成は早くとも6年後になると返事している。また、契約を結ぶことに躊躇をみせ、完成期日を未確定とし、拘束力のないものならば執筆を承諾するとしている。

㉓ 1935年9月4日付ブロック書簡

㉒への返事。完成期日を定めず、明確な契約関係にはしない条件で、『日本の農民』の執筆承諾を明言するように再び求めている。

㉔ 1935年9月29日付朝河書簡

㉓への返事。ブロックの提示した紳士協定というかたちで『日本の農民』の執筆を承諾し、執筆準備が整い次第、ブロックに連絡することを約束している。なお㉓は、ブロックの手稿がイェールに伝来しているが、これを朝河の側でタイプ打ちしたものがあり、そのタイプの紙の下半分の余白に㉓への返事の下書きを手書きしたものが㉔である。但し、朝河は㉓の日付の Sept. (9月) を Août (8月) と読み間違えている。

㉕ 1939年6月19日付ブロック書簡

アナルへの投稿を促しつつ、『日本の農民』執筆の催促をしている（1935年の約束からちょうど4年後）。また、出版予定のブロック著『封建社会』第1巻を朝河に献本することを約束している。これに対する朝河の返事は確認されず、同年9月には第二次世界大戦が始まる。

#### 4、朝河・ブロック往復書簡の論点

以上、25点にわたる往復書簡における主な話題は以下の5点である。

1. 朝河がフランス・ストラズブール留学を希望している旨をブロックに伝



える。ブロックは歓迎の意向を示すが、朝河のほうの都合が悪くなり、その話題は立ち消える。

2. ブロックは、日本語文献に関する情報がフランスでは不足しているという認識から、朝河に対してアナルへの協力を求めた。朝河は二本の書評を寄稿しており、書評執筆や抜刷の送付に関する事務連絡が交わされる。
3. ブロックはアナルへの日本人協力者を紹介するよう朝河に依頼し、朝河は市橋倭や高木八尺たちに声をかけるが、協力者は見つからず。
4. 朝河の「源頼朝の幕府創設」論文についてブロックが仏語発表を薦めたものの、「制度史」的であるためアナルへの掲載を却下したこともあり、結局実現はしなかった。ブロックに書評の対象範囲について尋ねた際、自己の研究は「制度史」的であると朝河が表明したように、「社会史」をめぐる共通理解の不在がみられる。
5. ブロックがガリマール社「農民と土地」叢書の『日本の農民』の巻の執筆を朝河に依頼。朝河は躊躇するものの、ブロックの熱心な働きかけによって、言質をとられるかたちになる。

このうち①が1929年(i期)、②～④が1930-32年(ii期)、⑤が1934-35年(iii期、1通のみ39年)になされたものであり、実質的には足かけ7年の交流となる。当初「比較史」をめぐる若干のやり取りは確認されるものの、具体的な学問的議論に発展せず、アナルをめぐる事務連絡が多くなる。

また、当初は朝河の側からブロックに接触したにもかかわらず、アナルへの日本人の協力を求めるブロックの強力なアプローチに、朝河の方から徐々に距離を置いていく様子がうかがえる。とはいえ、ブロックの申し出を断固拒否するという訳でもなく、『入来文書』の叙述編である『南九州の封建体制』<sup>(27)</sup>の執筆に集中するため時間がとれないなどと返事をしつつ、結局『日本の農民』の執筆を約束させられてしまう様子などは、朝河のひとりとなりを考える上で興味深い。他人を紹介できず、一人で引き受けてしまうところなど、性格的な問題なのだろうか、それとも朝河の人脈に由来する問題なのだろうか。

最後に相互の評価とそのズレに注目しながら朝河とブロックの交流について考えてみることにする。

## 5、朝河とブロックの相互評価

1929年の『入来文書』刊行後、朝河が接触を試みたことが判明している西欧の歴史家は、ブロックとオットー・ヒンツェであり<sup>(28)</sup>、それぞれに留学の可能性を打診していた。朝河は『入来文書』においてフランスとドイツの比較を試みていた。朝河はブロックに「諸制度に関するあなたの比較史的視点については長い間感服していた」（書簡①）と伝えており、のちに書評のなかで「余が先年ブロッツ氏に注目したのは、正しく氏が此少数の比較者の一人であったからである。」<sup>(29)</sup>と記している。ヒンツェについては、

1930年の『入来文書』書評に接して（書簡④）、1931年に接触を試みている。『入来文書』刊行を機にして、自分の売り込みを図っていたが、朝河のフランス留学意欲が1930年以降失せていく様子もまたブロックとの往復書簡から伺える。その一背景としては、朝河が1930年7月に助教授（assistant professor）から准教授（associate professor）へ、1933年7月に正教授待遇に昇進し、イェールにおける地位の安定化とともに多忙になっていたことが想定できよう<sup>(30)</sup>。また、1931年にはヒンツェにドイツ留学の相談をしていることから、朝河の学問的関心の変化自体を検討する必要もある。しかし、留学は実現することなく、史料集『入来文書』と対をなす研究書として構想された『南九州における封建体制』執筆も遅延して結局未完に終わる。

一方、ブロックもまた朝河を高く評価した。特に『入来文書』を実際に読んだ1930年夏以降（ii期）は、ブロックから積極的に働きかけている（ブロック側の伝来書簡も書簡④以降となる）。1929年は、ブロックにとってもアナル創刊という画期の年であったことに注目したい。ブロックは、政治・制度史中心のフランス歴史学主流派を批判して新しい歴史学の構築を目指すとともに、歴史家の国際的な組織化を試みていた。経済史に関心をもつアメリカの大学教授のリスト<sup>(31)</sup>を作成するなど、諸外国の歴史家について情報収集を行っていたようである。ブロックにとって朝河は、日本史に関する重要な情報提供者・紹介者であったに違いない。

だが、特に注目したいのは、ブロックは、朝河との出会いによって比較対象の広がりを得たのではないかということである。1924年刊行の『王の奇跡』において未開社会を意識しつつ英仏比較を行ったブロックは、1928年12月刊行の「ヨーロッパ社会の比較史のために（比較史の方法）」において比較史の重要性を論じたが、そこでは比較史のタイプを二つに分けている。一つは、「ある現象において類似性がみられるが、その現象を生みだした諸社会が時間的にも空間的にも著しく隔たっているため、明らかに相互の影響関係によってもあるいは如何なる意味の起源の共通性によっても、その類似性が説明されない」諸社会を比較する場合、もう一つは「隣接していると同時に同時代のものであり、相互に絶えず影響を与えあつて」いるような諸社会を比較する場合であるとした。そして後者こそが「厳密な意味での歴史の領域に属」す比較史のタイプであるとして<sup>(32)</sup>、ブロック自身は後者の手法で西欧諸国間の比較検討を試みていた。

このようなブロックにとって1929年の朝河との出会いは、いわば《比較対象としての日本の発見》であった。朝河からの最初の書簡に対する返事（書簡②）のなかでブロックは「ヨーロッパ人にとって、あまりに身近になっているがゆえに、全く当たり前になっていて、わざわざ説明しようとしなくなってしまう幾つかの大きな特徴の重要性に注意を喚起しています。」と述べ、農業技術と社会体制との関係に着目する人文地理学的視点（朝河は日本の稲作水田、ブロックはフランス農村の二圃制・三圃制などに注目）にも共感するところがあつたと伝えている。「耕地と牧場の組み合わせ」という

視点は、1931年刊行のブロック著『フランス農村史の基本性格』にみえ、「これは基本的な特徴であり、われわれの技術文明を極東のそれと最もはっきりと対立させる特徴の一つである。」と論じている<sup>(33)</sup>。この年のアナルに掲載した「封建制、従士制、領主制」という研究動向論文において、ブロックは『入来文書』を書評している<sup>(34)</sup>。そして日本を比較の参照軸として西欧社会の基本的な特徴を論じたのが1939-40年刊の大著『封建社会』であった。西欧の古典学説をベースにして日本封建制論を体系化した朝河の『入来文書』や論文が、日本に関する情報源として活用された。

これに対して、朝河自身は歴史家の組織化に必ずしも積極的ではなく、昇進や著書執筆などで多忙になり、さらにドイツの国制史家ヒンツェとの出会いも重なり、ブロックとの交流に消極的になっていったと考えられる。日欧比較自体は、朝河が早い段階から有していた視点であり、ヨーロッパ各国間の封建制の比較という試みも、1920年代以降朝河がイエール大学の演習において実践していたものであった。

さらに朝河自身が「制度史」を重視し、「社会史」概念について共通理解を見出せないことに戸惑いを感じていた点も見逃ごせない（書簡④⑤）。1932年8月、朝河は源頼朝の鎌倉幕府創建に関する論文の投稿をアナルに提案している。いまだ日本の学者によって「制度史的」に取り扱われたことがないもの<sup>(35)</sup>、「日本の封建制がヨーロッパのものとは異なる全ての理由」が頼朝の幕府創建にあるという自説を伝えていた（書簡⑬）。だが、まさに「制度史的」にすぎるという理由で、朝河の頼朝論文はアナルへの掲載を見送られた（書簡⑭）。朝河自身もアナル以外の媒体への論文掲載を事実上謝絶し（書簡⑯）、それ以降アナルとの協力関係は確認されなくなる（ii期の終焉）。結局、朝河は、日本語で書かれた研究文献を紹介する書評論文2本をアナルに掲載するにとどまった。

結局、二人の交流は互いの学問に何を残したのか。朝河によって日本を知ったブロックに比べて、30年代の朝河は日本封建制論を完成できず、明暗が分かれた感に否めない。この点は両者の封建制・「社会史」概念の異同を踏まえてさらに議論を深める必要がある。但し、『入来文書』以降の朝河の学問的な歩みについては、未刊に終わった草稿（特に封建制理論にかかわるもの）も多く、なお今後の具体的な解明が望まれる。ブロックとの出会いが朝河に何をもたらしたのか。そこに戦間期における新たな歴史学の潮流を国際的な学術交流の観点から再検討する手掛かりがあるように思われる。

【附記】本稿は2009年度東京大学法学部日本法制史演習（新田一郎教授）および2010年7月17日に開催した研究会報告の成果をもとにしている。演習参加者は、石川夏子・小川祐樹・黒須智之・国分航士・五島彰人・斎藤史朗・佐藤雄基・朴完・平野秀文・向井伸哉・山口道弘であり、流王貴義氏の協力も得た。ご指導いただいた新田先生をはじめとして参加者の皆様に感謝申し上げます。なお本稿の概要は『朝河貫一研究会ニュース』71号（2010年）で

も発表している。イエール大学所蔵分は2008年、福島県立図書館所蔵分は2009年に佐藤が調査しており、コルマールの調査が2015年3月に実現したことを機に（このときの調査は向井・佐藤が行い、コルマール市立図書館上級司書のRémy Casin氏にお世話になった。立教大学SFR共同研究「グローバルヒストリーのなかの近代歴史学」の一環でもある）、向井・斎藤・佐藤が一連の成果をとりまとめて公表することにした。解題は佐藤が執筆し、向井と読み合わせを行い、翻刻は斎藤がとりまとめたものを向井・佐藤が校正した。

なお、イエールの調査では、イエール大学東アジア図書館の中村治子氏にお世話になった。現在、中村氏が中心となって朝河のネットワークを視覚化するAsakawa Epistolary Network Projectが進められている。

【表】朝河・ブロック往復書簡リスト

手紙番号	年月日	発信者（言語）	所蔵先	『書簡集』
1	1929年5月7日	朝河（英文）	Yale	146号
2	1929年5月24日	ブロック（仏文）	Yale	
3	1930年10月6日	ブロック（仏文）	Yale	
4	1930年11月20日	朝河（英文）	Yale, Colmar	168号
5	1930年12月5日	ブロック（仏文）	Yale, Colmar	
6	1931年1月8日	朝河（英文）	Yale, Colmar	159号
7	1931年1月23日	ブロック（仏文）	Yale	
8	1931年2月8日	朝河（英文）	Colmar	
9	1931年3月28日	朝河（英文）	Colmar	
10	1932年7月15日	朝河（英文）	Colmar	
11	1932年7月24日	朝河（英文）	Colmar	
12	1932年8月1日	ブロック（仏文）	Fukushima	
13	1932年8月14日	朝河（英文）	Colmar	
14	1932年9月24日	ブロック（仏文）	Fukushima	
15	1932年11月4日	ブロック（仏文）	Yale	
16	1932年11月20日	朝河（英文）	Colmar	
17	1934年11月23日	ブロック（仏文）	Yale	
18	1934年12月10日	朝河（英文）	Yale	192号
19	1934年12月25日	ブロック（仏文）	Yale	
20	1935年1月21日	朝河（英文）	Yale	
21	1935年6月19日	ブロック（仏文）	Yale	
22	1935年8月18日	朝河（英文）	Yale	
23	1935年9月4日	ブロック（仏文）	Yale	
24	1935年9月29日	朝河（英文）	Yale	
25	1939年6月19日	ブロック（仏文）	Fukushima	

## 註

- (1) 石井進「中世社会論」（『中世史を考える—社会論・史料論・都市論』校倉書房、1991年、初出1976年）、上横手雅敬「封建制概念の形成」（『日本中世国家史論考』塙書房、1994年、初出1980年）。
- (2) オッター・ヒンツェ著、阿部謹也訳『封建制の本質と拡大』（未来社、1966年、原著1929年）。比較封建制論については、Rushton Coulborn, ed., *Feudalism in history*, Princeton, N.J., 1956 および外村直彦『比較封建制論』（勁草書房、1991年）。
- (3) Susan Reynolds, *Fiefs and Vassals. The Medieval Evidence Reinterpreted*, Oxford, 1994.
- (4) 保立道久『歴史学をみつめ直す：封建制概念の放棄』（校倉書房、2004年）。
- (5) 近代日本政治思想史上の「封建」概念の射程については、河野有理「「社稷」の日本史」（松沢裕作編『近代日本のヒストリオグラフィー』山川出版社、2015年）などが参考になる。
- (6) 朝河の評伝については、阿部善雄『最後の「日本人」』（岩波書店、1983年）、山内晴子『朝河貫一論：その学問形成と実践』（早稲田大学出版部、2010年）。
- (7) 以上、キャロル・フィンク、河原温訳『マルク・ブロック 歴史のなかの生涯』（平凡社、1994年、原著1989年）、二宮宏之『マルク・ブロックを読む』（岩波書店、2005年）参照。
- (8) 前掲註6、阿部著、山内著、前掲註7、二宮著、原輝史「二人の比較史家：朝河貫一とM・ブロックの『社会経済史年報』誌上論文」（朝河貫一研究会編『朝河貫一の世界』早稲田大学出版部、1993年）など。
- (9) 予備的な考察として、佐藤雄基「マルク・ブロック『封建社会』と朝河貫一」（『東京大学日本史学研究室紀要』14号、2010年）。
- (10) John Harvey, “Le «Annales» e la storia comparata. Corrispondenza inedita di Marc Bloch e Kan'ichi Asakawa, 1929-1935,” *Passato e Presente*, LXXI, 2007（イタリア語）。
- (11) 拙稿「イェール大学図書館所蔵朝河貫一文書（朝河ペーパーズ）の基礎的研究」（『東京大学日本史学研究室紀要』13号、2009年）および拙共著『朝河貫一資料』（早稲田大学アジア太平洋研究センター、2015年）第1章のリスト参照。
- (12) 拙共著『朝河貫一資料』（早稲田大学アジア太平洋研究センター、2015年）第2章のリスト参照。
- (13) ルイヨについては、彼の追悼記事（*Annales. Histoire, Sciences, Sociétés, Civilisations*, XLII, 1987, pp. 1251-1253）および *Le Nouveau Dictionnaire de biographie alsacienne*, Strasbourg, 1990 の記事をはじめ、コルマル市立図書館上級司書のRémy Casin氏の教示を得た。なおアナル関連史料については Joseph Tandler, *Opponents of the Annales School*, New York, 2013 所収の表が詳しい。
- (14) 原題 “Agriculture in Japanese History: a General Survey,” *The Economic History Review*, II, 1929 および “The Early SHŌ and the Early Manor: a Comparative Study,” *Journal of Economic and Business History*, L, 1929 である。ともに朝河貫一著書刊行委員会編の遺稿集 *Land and society in medieval Japan*（日本学術振興会、1965年、奥付タイトル『荘園研究』）に収録されている。

- (15) Jules Sion, *Asie des Moussons*, Paris, 1929-1930.
- (16) O. Hintze, “K. Asakawa, trans. et ed., *The documents of Iriki, illustrative of the development of the feudal institution of Japan*, New Haven; London; Oxford, 1929,” *Historische Zeitschrift*, CXLII, 1930; E. R. Avondo, “Il feudalesimo giapponese visto da un giurista europeo,” *Rivista di storia del diritto italiano*, III, 1930. ブロックによる書評は M. Bloch, “Féodalité, Vassalité Seigneurie,” *Annales d’histoire économique et sociale*, III, 1931.
- (17) イェール大学図書館所蔵の朝河側の控えには「1931」とタイプ打ちされた「1」の上に「0」と上書きされているが、コルマール市立図書館所蔵のブロック受信書簡は「1931」のみである。内容的にはブロックの書簡⑥に対する朝河の返事であるので、「1931」が正しい。『朝河貫一書簡集』は1930年の書簡として収録している(159号)。
- (18) “Une histoire économique du Japon ; L’esclavage dans l’ancienne économie japonaise ; Une ville : Sakai,” *Annales d’histoire économique et sociale*, III, 1931.
- (19) M. Bloch, “Un essai d’histoire comparée : Europe occidentale et Japon,” *Annales d’histoire économique et sociale*, II, 1930.
- (20) 1931年1月18日付高木八尺宛朝河貫一書簡(福島県立図書館所蔵「朝河貫一書簡」A-12-4、『朝河貫一書簡集』170号)。
- (21) M. Bloch, “Feudalism: European,” in E. R. A. Selligman, ed., *Encyclopedia of the Social Sciences*, VI, New York, 1931. 日本の封建制の項目は朝河が担当した。
- (22) “La place de la religion dans l’histoire économique et sociale du Japon,” *Annales d’histoire économique et sociale*, V, 1933.
- (23) “CX. L. Febvre à M. Bloch, 1932/7/28,” in Marc Bloch et Lucien Febvre, *Correspondance*, I, 1928-1933, Paris, 1994 : (ブロック宛てフェーヴル書簡)「今朝、朝河の小包を受け取りました。私も少し困っています。これは長くて、「回りくどい」です。しかしながら、もちろん我々にとって新しく、有益で、悪くないものです。私もあなたと同様、スペースに関して、はしょれる場所はあまりないと思います。私は本文の一部を脚注にまかせないか見てみましたが、難しそうです。〔中略〕明らかに、これは刊行する必要があります。しかし、いつ、どうやって? 二部に分割しますか?」
- (24) 朝河貫一「ブロッシ教授の「仏国田園史特徴論」(『社会経済史学』第5巻第9号、1935年)。
- (25) このときフェーヴルが反対したらしい。“CXII. L. Febvre à M. Bloch, 1932/9/21,” in Bloch et Febvre, *Correspondance*, Iによれば、フェーヴルはブロックに対して、「朝河の件については、私は困っています。アナルに関しては否です。」としつつ、「Revue de Synthèse に関しては、オーストリア・ハンガリーからの帰路、パリに立ち寄った際、ベール(Berr) [= Henri Berr] に会ってきました。彼は〔朝河論文の掲載を〕了解してくれました—もちろん私は彼に言いに行ったのです—。なぜなら、私が彼に了解するようたきつけたからです。〔中略〕私は朝河に以下のように書くのが最良であると思います。原則として論文は受け入れられ、強く望まれてさえているということ。我々に論文を送ってもらい、彼の文通相手 [= ブロック] に、都合に応じて *Revue de Synthèse* か

*Revue Historique* かの選択を任せること。」と述べるように、総合雑誌や史学雑誌の編集者にあたって朝河論文の掲載を手配している。

- (26) K. Asakawa, “The Founding of the Shogunate by Minamoto-no-Yoritomo,” *Seminarium Kondakovianum : Recueil d’Études, Archéologie, Histoire de l’Art, Études Byzantines*, VI, 1933.
- (27) 前掲註 11、拙稿 92 頁。
- (28) 1931 年のヒンツェとの往復書簡も福島県立図書館所蔵朝河文書に含まれる（後日紹介予定）。
- (29) 前掲註 24、朝河論文 111 頁。
- (30) 前掲註 6、阿部著。
- (31) 前掲註 10、ハーヴェイ論文も指摘するように、コルマール市立図書館所蔵ルイヨ文書に「Personnel des universités des Etats Unis avec intérêt spécial dans l’histoire économique（経済史に特定の関心をもつ合衆国の大学の人物）」とタイプされた文書がある（但し、その中に朝河の名はみえない）。なおその作成年代は記載の人名の職位からみて 1933-34 年頃と推定される。
- (32) マルク・ブロック著、高橋清徳訳『比較史の方法』（創文社、1978 年、原論文 1928 年）7-9 頁。
- (33) マルク・ブロック著、河野健二・飯沼二郎訳『フランス農村史の基本性格』（創文社、1959 年、原著 1931 年）47 頁。
- (34) 前掲註 16。
- (35) 日本の学界では、中田薫や牧健二らによる守護地頭論争がすでになされていた。この朝河の言明は、同時代の日本の研究者との《距離感》を考える上で興味深い。

朝河貫一とマルク・ブロックの往復書簡（向井・斎藤・佐藤）

## 凡例

史苑  
(第七六卷  
第二号)

◎各文書冒頭の番号横に次のように表記した。

ブロック宛朝河書簡：**Asakawa to Bloch**

朝河宛ブロック書簡：**Bloch to Asakawa**

◎その横に出典を注記した。

### ABBREVIATIONS (略記)

Colmar: The municipal library of Colmar (Bibliothèque municipale de Colmar), France

LP: Paul Leuilliot Papers (ルイヨ文書)

Fukushima: Fukushima Prefectural Library (福島県立図書館), Japan

AS: Asakawa Kan'ichi Shiryō (朝河貫一資料)

Yale: Manuscripts and Archives, Yale University Library, USA

AP: Asakawa Papers (朝河文書)

◎タイプ打ちのものは出典の横に typed script と、手稿は manuscript と記した。

◎正文と控えがそれぞれ現存する場合、正文の翻刻を優先し、控え (copy) の所蔵情報を併記した。

◎下線は原文のまま。

◎単語のつづりなどの些細なミスは、基本的に [ ] を用いて訂正した。

◎その他、原文ママにすべきと判断した箇所については、[sic] を付した。

◎手稿の控え (㉔ ㉕など) において朝河が用いた助動詞の省略形は原形にもどした (wd=would, cd=could など)。



**Letter 1 : Asakawa to Bloch 1929.5.7 (Yale, AP, Box 2, Folder 25, typed script)**

May 7, 1929

Professor Marc Bloch  
University of Strasbourg,  
Strasbourg, Germany [sic]

Dear Sir:

I am taking the liberty to have a copy of my recently published book “The Documents of Iriki” sent to the editors of the Annales d’Histoire Économique et Sociale. I should feel greatly honored if you considered my humble work worthy of a notice in the Annales. Being a long-time admirer of your comparative point of view regarding institutions, I feel that perhaps my pioneer work on Japanese feudalism might evoke a sympathetic interest in you, if it would in any scholar.

I am also sending to you reprints of two of my recent articles, which also touch on institutions.

It is nearly thirty years since I began my study of European institutions; and I have now for several years conducted, at Yale University Graduate School, courses of instruction in European feudalism. This venture into the Occidental field I have carried on in parallel with my original investigations of Japanese feudalism. The comparison of the two systems is, as you may well imagine, extremely illuminating, and also continually challenges me with questions of comparison within the Occidental system itself, — between the French, English, German, and Italian institutions. In this special pursuit, your various works, dear Sir, have been of inestimable value and stimulus to me. In very few other scholars I have found so much zeal for comparison and so abundant information as in you.

I have often wondered if you would be willing to have me come to Strasbourg to work with you for a half-year or a year. I am not yet in a position to say definitely when I may be able to come and what special topic I should propose to study under your direction; but I should be anxious to know if you would feel disposed to welcome such a visitor, and what facility the University of Strasbourg and its Library would offer to him.

With high esteem, I am  
Yours sincerely,  
KA: F

朝河貫一とマルク・ブロックの往復書簡（向井・斎藤・佐藤）

**Letter 2 : Bloch to Asakawa 1929.5.24 (Yale, AP, Box 2, Folder 25, manuscript)**

史苑  
(第七六卷第二号)

Strasbourg, 17 Av. de la Liberté  
24 mai 1929

Monsieur et cher collègue,

Je tiens à vous remercier, sans plus tarder, de votre très aimable lettre, de vos deux brochures — que j'ai reçues il y a deux jours — et de votre ouvrage The documents of Iriki que nous nous réjouissons de recevoir. Je connaissais déjà vos deux articles, que j'avais lus dans leurs revues respectives, et j'y avais, comme vous le pensez, beaucoup appris, comme renseignements de fait et comme suggestions, la comparaison que vous instituez entre les institutions de votre pays et celles de notre Europe est certainement très féconde, parce que, manière comme vous savez le faire, elle fait ressortir, non les ressemblances seulement, mais aussi les différences. Et puis, vous attirez l'attention sur l'importance de certains grands traits, qui nous sont devenus à nous autres Européens si familiers qu'ils nous semblent tout naturels et que nous ne cherchons plus à les expliquer. J'avais déjà été frappé, en lisant le beau livre de Sion sur l'Asie des Moussons et je l'ai été à nouveau, en vous lisant, du caractère vraiment original (bien qu'il nous paraisse aller de soi) de cette association de la terre labourée et de la pâture qui est le fondement de notre agriculture européenne. J'ai grand plaisir à posséder vos deux travaux et à les tenir de vous.

Vous êtes très aimable de penser que vous auriez à gagner quelque chose en travaillant avec moi. Mais, pour ma part, je pense que j'aurais beaucoup de profit à tirer de relations personnelles avec vous et d'échanger d'idées sur certains problèmes et certains textes. C'est vous dire combien je souhaite que vous puissiez exécuter votre projet de venir travailler à Strasbourg. Sincèrement d'ailleurs, je crois pouvoir vous y engager.

D'abord pour les ressources en livres. La Bibliothèque Nationale et Universitaire est certainement la plus riche de France après celles de Paris. Sur un point, elle est même plus riche que les bibliothèques parisiennes: sur l'histoire d'Allemagne. Naturellement quand nous sommes arrivés ici, en 1919, nous nous sommes aperçus que nos prédécesseurs avaient un peu négligé l'histoire de France et, encore beaucoup plus, l'histoire d'Angleterre. Nous avons cherché à combler les lacunes, et, vraiment, nous n'avons pas trop mal réussi. Indépendamment de la

Bibliothèque Nationale et Universitaire, vous trouverez à l'Université même des bibliothèques d'Instituts, — bibliothèques de travail, mettant directement sous la main de l'étudiant les livres essentiels et surtout les instruments de recherche. Je les crois fort utiles. Je me hâte d'ajouter toutefois — car je ne voudrais pas que vous ayez de désillusion — que ni par l'ampleur des crédits, ni, probablement, par le confort et la commodité de l'organisation, nos bibliothèques ne sont au niveau des bibliothèques des États-Unis, que je n'ai pas pratiquées personnellement, mais dont je sais, par ouï-dire, toute la perfection. Il est possible, cependant, que vous trouvez chez nous plus de livres d'histoire européenne.

À l'Université, vous trouverez une équipe d'historiens plus nombreuse qu'ailleurs en France, Paris excepté, et je crois que vous aurez plaisir à fréquenter plusieurs de mes collègues, Febvre et Lefebvre, par exemple. Notre enseignement souffre parfois de l'insuffisance de préparation des étudiants — trait général, il me semble, dans toutes les Universités — et aussi du caractère un peu trop scolaire des examens. Tout de même, nous nous efforçons — et je m'y efforce personnellement de tout mon pouvoir — à lui donner, malgré cela, un tour vraiment scientifique.

Aussi bien, si vous venez parmi nous, nous vous demanderons de nous aider. J'imagine que vous parlez français, et je suis sûr, en tout cas, que vous le parlerez bien vite. Quelques leçons de vous soit sur l'histoire du Japon, soit sur l'étude comparée des civilisations japonaises et européennes, seraient certainement les bienvenues. Naturellement, il ne pourrait guère s'agir que de ce que nous appelons un «cours libre» (en dehors du cycle régulier d'enseignement, et, en principe, non rétribué); mais de pareils cours ont été plusieurs fois professés dans nos Universités par des travailleurs en renom. Vous vous honoreriez en le faisant et je suis persuadé que mes collègues, le moment venu, accepteraient très volontiers vos propositions et votre programme.

C'est donc sur l'espoir de vous voir ici que je terminerai cette lettre en vous adressant, Monsieur et cher collègue, l'expression de mes remerciements et de mes sentiments parfaitement dévoués.

Marc Bloch

Je prends la liberté de vous envoyer un travail, un peu rapide, où vous trouverez traitée et décrite cette méthode comparative sur laquelle nous fondons, vous et moi, les plus belles espérances. C'est un lien entre nous.

**Letter 3 : Bloch to Asakawa 1930.10.6 (Yale, AP, Box 3, Folder 28, manuscript)**

史苑  
(第七卷第二号)

Strasbourg, le 6 oct. [19]30

Monsieur et cher collègue,

J'ai lu, au cours des vacances — n'ayant pas eu le loisir de le faire plus tôt — vos Documents of Iriki. J'y ai pris, permettez-moi de vous le dire, un intérêt des plus vifs, et, malgré mon incompetence, je m'efforcerai de faire partager ce plaisir aux lecteurs des Annales. Rarement essai d'histoire comparée m'a autant instruit, et m'a paru d'une méthode aussi sûre. Mais il y faut l'étonnante variété de connaissances qui vous permet de parler, de première main, à la fois des daimios et des yassi dominici.

Cette lecteur m'a encouragé à vous demander votre aide pour les Annales. Vous connaissez certainement notre revue. Vous savez que nous nous y efforçons de toute façon d'élargir l'horizon, souvent un peu étroit, des historiens français, voire européens, et que nous y faisons une part très large à l'histoire comparée. Mais la tâche est rude et il y faut beaucoup de travailleurs de bonne volonté. Votre appui nous serait infiniment précieux et en nous le prêtant, je vous en assure en toute sincérité vous feriez œuvre scientifiquement utile. Vous pouvez nous le donner de diverses façons.

D'abord en nous envoyant un article. Il nous faudrait un sujet assez large pour intéresser la masse de nos lecteurs. Précisément, cette largeur de vues est la caractéristique de vos travaux. Dans le domaine de l'économie ou de la structure sociale du Japon, tant de thèmes seraient à traiter! Je me permets, en passant, d'en indiquer un: l'histoire de la noblesse. C'est un ordre d'études sur lequel nous nous proposons d'ouvrir un jour prochain une sorte d'enquête, destinée, du moins, à poser les questions. Sous ce mot de noblesse, on comprend tout de réalités diverses! Voulez-vous y songer? Vous pouvez soit nous donner tout de suite une étude sur la noblesse japonaise — sur le plan de l'histoire comparée qui vous est si familier — soit vous réserver pour l'ouverture de notre enquête. Si vous pouvez nous fournir l'article sans trop tarder, nous nous en servirons volontiers pour avancer l'enquête même. Si vous préférez attendre, ce sera à votre gré. Mais dans ce cas, n'auriez-vous pas un autre sujet à nous proposer? par exemple — puisque vous avez déjà traité ailleurs du village — sur l'organisation des métiers dans l'ancien Japon. Tout cela, bien entendu, à titre de suggestion. Vous êtes meilleur juge que nous.

Il y a plus. Si vous voulez bien parcourir nos numéros, vous serez frappé, certainement, de la faible part qu'y tient le Japon, de l'absence totale de toute recension d'ouvrages écrits en japonais. On croirait une revue des environs de 1820! Voilà à quoi il faut remédier. Ne voulez-vous pas, là aussi, nous aider? Vous devinez bien la difficulté: nous avons de bons japonisants, mais ils ne sont pas historiens, et les historiens ou les économistes chez nous ne savent guère le japonais. Vos compatriotes, vous même, mon cher collègue, qui unissez si intelligemment les deux cultures, pouvez seuls nous tirer d'embarras. Lorsqu'il paraît en japonais, un ouvrage relatif au Japon et susceptible d'intéresser nos études (histoire de l'économie ou de la société, économie et société du présent), ne voudriez-vous pas accepter soit de nous en donner vous même le compte rendu, soit de nous recommander un travailleur susceptible de vous remplacer? Je pense qu'il ne sera jamais très difficile de se procurer l'ouvrage, que nous demanderons à l'éditeur (mais il serait bon de recenser aussi les principaux articles de revue). Pour les ouvrages écrits en langues européennes, nous serions aussi très heureux, le cas échéant, de vous en demander le compte rendu. Mais là vous ferez bien de nous prévenir toujours à l'avance. Au moins pour le Japon contemporain, nous avons quelquefois des collaborateurs qualifiés.

Nous tenons également aux deux services que nous vous demandons, aux deux formes de collaboration que nous vous proposons: article et comptes rendus (ces derniers groupes, si possible, sous des rubriques d'ensemble). Nous espérons que, sur les deux points, vous pouvez nous donner une réponse favorable.

Vous m'aviez fait prévoir, dans une précédente lettre, un voyage en France. J'ose former le vœu que vous n'y ayez point renoncé. Rien ne me serait plus agréable, et plus profitable, que de causer avec vous.

Veillez, Monsieur et cher collègue, accepter, avec nos remerciements pour ce que vous croirez pouvoir faire pour nous, l'expression de mon sincère dévouement.

Marc Bloch

Nous aimerions bien être aussi tenus au courant des publications statistiques japonaises. Quant aux articles ou comptes rendus, il suffit, s'ils ne peuvent être écrits en français, que la langue choisie soit une des grandes langues européennes, l'anglais par exemple. Nous ferons aisément traduire.

**Letter 4 : Asakawa to Bloch 1930.11.20 (Colmar, LP, typed script;  
a copy in Yale, AP, Box 3, Folder 28, typed script)**

November 20, 1930

Professor Marc Bloch,  
University of Strassbourg [*sic*],  
Strassbourg [*sic*], France.

My dear M. Bloch:

I humbly beg your pardon for my long delay in answering your very kind letter. This has been caused in part by want of time, and also by the fact that, if I accepted fully your proposition — which would do honor not only to me personally but also to our History Department and to our University —, it would result in my diverting to another channel a part of my time which I am devoting to my usual work for the University. I have consulted my colleagues about the matter, and now am able to write you faithfully of the situation in which I am, and of what I might be able to do for you.

Before everything, I thank you sincerely for having read my Documents of Iriki. I am much beholden to you that you, during your very busy hours, should take time to look over so tedious a book, and should be willing to write a notice of it in your Annale[s]. You flatter me much by the compliments which you have given me about the book in your letter. Among the reviews of the book that I have seen so far, the one by Otto Hintze in the Historische Zeitschrift, 1930, Heft 2, and the one by Avondo in the Rivisto [*sic*] di storia del diritto Italiano, January, 1930, are more careful than the others. I now look with impatience for your own review in the Annale[s].

I feel, as I have said, greatly honored by being asked by you to cooperate with you in the Annale[s] in so important a capacity as you propose. It would give me the greatest of pleasure to comply with your wishes to the fullest extent, if I were able to do so, but I am too diffident to do more than proposing to share partially and imperfectly the work which you have proffe[r]ed to me.

In the first place, my training and my interest are not in the field of economic history as such, but in that of institutional history. I touch on economic aspects only so far as they touch the institutional. Specially on modern economic conditions my knowledge and interest are extremely limited.

In the second place, my duties of teaching and of writing are even too

much for all the time that I can command, and there is hardly any time that I can use for other activities. I am trying to limit as far as possible my connections with work outside of the University, although I am naturally obliged to carry some extra labor in several learned societies. In the meantime, my preparation for my next book on the Feudal régime in South Kyushu, long since announced, is protracted beyond all measure, and I am very impatient.

In this preparation, which consists of an intensive study of an enormous number of documents, my mind is engrossed in details of the principles and the working of institutions, specially in the judicial sphere. This kind of work, as you well know, absorbs so much of one's best powers, and leaves little which might be used in purely social and economic fields.

Would you be willing to permit me to cooperate in your Annale[s] in the following limited way, and also to answer the queries that I shall ask in relation to my proposition?

In short, I might send you notices of such books and articles as would come within my sphere of interest, and only as I should find time to write the notices between my crowded work-hours, without assuming the responsibility of either covering all fields of Japanese social and economic history and all the best books and journals which would be published, or sending you regularly at a stated time and a stated quantity of notices. I might also send you my own articles now and then, but can hardly prepare one on [the] nobility which you have suggested. It is a very attractive topic, and I can well see interesting problems about it, but there are several extra-University pieces which I have already promised to write; another article cannot be attempted before these engagements are out of the way. Would you care for the flexible arrangement which I have suggested above? I hope, my dear colleague, that you will not hesitate to answer me quite frankly.

About the books and articles of which I might send you notices, I beg you to understand that my selection of them would not be as comprehensive as even my limited training and interest would enable me to make, but more restricted than I would like myself. This is not only because my time is short, but also because I cannot afford to buy more than a few of the many books and journals that are being printed in Japan.

This defect might be remedied in two ways: — either by your sending me what comes to you, and my returning it to you after I write notices thereof; or by my trying, with your authorization, to persuade publishers or authors in Japan to send me copies direct for the purpose of being

noticed in the Annale[s]. In the latter case, it would save time and trouble if I had the works sent to me, instead of to you; after writing notices, I can, if you desire, send the works to you.

Now, as to my questions to you. Of books and articles which interest me, there are some of importance that appeared within the last few years. How far back would you have my notices reach? Would you rather exclude what was not published in the immediate past?

From the category of histoire sociale, would you exclude what is purely legal, judicial, or technically institutional, no matter how important the work may be, for the reason that it is not sociale? If you do, you would except exactly what most engages my attention.

I hope to be able to send you soon a notice of a recent great work on the history of the trading city Sakai, near Osaka.

Indeed, I have never given up my desire to come to Strassbourg [*sic*] to work with you. But, if you will permit me to refer to my personal affair, it is not easy to save enough money for an extended sojourn in a foreign land. I do not yet know when the happy time will come. I also have fears that you are too busy with your editorial labor added to your other work, to be burdened with an ignorant foreigner intruding upon you. Does not your editorial work consume more of your precious time of research and production than you would like? Please forgive this impertinence, for I am merely expressing my sympathy as an academic man.

In high personal esteem,  
I am  
Very sincerely yours,  
K. Asakawa.

**Letter 5 : Bloch to Asakawa 1930.12.5 (Yale, AP, Box 3, Folder 28, typed script; a copy in Colmar, LP, typed script)**

Strasbourg, le 5 Décembre, 1930

Mon cher collègue,

Je vous remercie de votre lettre à la fois si obligeante et si franche, et j'y répons sans tarder.

Nous vous sommes infiniment reconnaissant de la collaboration que vous voulez bien nous promettre, dans la mesure de vos forces; la note sur Sakai sera la très bienvenue. Vous nous enverrez les comptes-ren-



dus quand il vous sera possible. Tout recenser serait, en tout état de cause, une chimère; l'essentiel est de ne manquer aucun ouvrage véritablement important et je suis persuadé que, grâce à vous, nos lecteurs seront beaucoup mieux renseignés sur l'ancienne société japonaise que ceux de n'importe quelle autre revue. Je suis leur interprète en vous remerciant.

Je réponds maintenant aux questions que vous avez bien voulu me poser, et en même temps, je prends la liberté de préciser quelques points relatives à votre collaboration.

1) La règle générale pour les comptes-rendus est suivante. Nous demandons, soit de nous-même, soit sur le conseil de nos collaborateurs, les livres aux éditeurs (pour les revues nous sollicitons parfois des auteurs d'articles l'envoi de tirages à part). Nous recevons ici ceux qu'on veut bien nous envoyer — le plus grand nombre de beaucoup de ceux que nous demandons — et à notre tour nous les adressons aux collaborateurs qui acceptent de se charger des comptes-rendus, et qui, naturellement, gardent la propriété des ouvrages; c'est hélas! (sauf pour les articles ou les longues notes, qui sont payés) leur seule rémunération. Il semble que dans votre cas, il sera bon de simplifier un peu la procédure de la façon suivante. Vous pourriez nous envoyer régulièrement la liste des livres que vous jugez bon de recevoir; nous les demanderons aux éditeurs (je pense qu'il n'y a pas d'inconvénient à formuler les titres en alphabet latin), en priant ceux-ci de vous les expédier directement. Vous voudrez bien de temps en temps — par exemple en nous adressant vos comptes-rendus — nous envoyer la liste des ouvrages que vous avez reçus (même si vous n'en avez pas encore rendu compte), de façon à nous permettre de tenir nos écritures en ordre. Naturellement il arrive quelquefois qu'à titre bénévole un auteur rende compte d'un livre qu'il a lu, sans le tenir de l'éditeur; nous vous serons toujours reconnaissants de nous rendre à l'occasion ce service, surtout pour les plus importants des articles de revues, qu'il est souvent malaisé d'obtenir; même pour les livres proprement dits, cette façon de faire sera peut-être plus souvent nécessaire au début, jusqu'à ce que la librairie japonaise ait pris l'habitude de penser à nous.

2) À ce propos, je vous demanderai, si vous le voulez bien, un service; il est possible en effet que dans les premiers temps vos éditeurs nous connaissent mal et soient peu généreux. Peut-être une lettre personnelle de vous auprès des principales maisons ou une démarche que vous feriez faire nous faciliteraient-elle les choses; vous verrez vous-même dans quelle mesure vous pourrez agir. En Europe, à l'exception d'une maison

anglaise, très conservatrice, nous n'avons qu'à nous louer de la librairie; notre revue, à vrai dire, est déjà bien connue.

3) Aucune raison de ne pas recenser, puisque vous le voulez bien, les ouvrages parus depuis quelques années déjà. Pour des motifs trop aisés à comprendre, les périodiques français suivent très mal la production japonaise. Donc le retard apparent, si retard il y a, ne nuira pas à la nouveauté de fait de notre information.

4) Rien de plus délicat que la question que vous me posez au sujet des limites de l'histoire «sociale». Je crois qu'en pareille matière — vous l'avez bien senti — il n'est pas possible de dire «no matter how important the work may be», car un livre vraiment important a un rayonnement qui dépasse toujours les problèmes purement techniques. Nous excluons l'histoire politique proprement dite et celle des détails de la vie juridique. Un ouvrage de droit, d'institutions politiques même peut en revanche nous intéresser s'il jette quelques lueurs sur la structure sociale elle-même (classes, groupes familiaux, etc.). Inutile de vous dire que, par exemple, vos documents d'Iriki sont tout à fait dans notre cadre. Envoyez-nous donc, assez largement les compte-rendus des livres qui vous semblent intéressants; peu à peu, en cours de collaboration, par échanges d'observations entre nous, la norme se fixera d'elle-même.

5) Pour les livres sur l'économie japonaise contemporaine, dont vous préférerez ne pas rendre compte vous-même, voyez-vous un autre collaborateur à signaler? De notre côté, nous avons entendu parler d'un ou deux collaborateurs possibles; mais votre recommandation plus que tout autre serait précieuse.

Je serais, moi aussi, infiniment heureux de pouvoir travailler avec vous; j'aurais beaucoup à apprendre dans une pareille collaboration. Il est exact hélas! que mes obligations professionnelles et mon travail directorial me prennent beaucoup de temps; mais je crois que nous faisons aux Annales œuvre utile et votre sympathie m'est garant que je ne me trompe pas tout à fait.

Veillez, mon cher collègue, accepter l'expression de mes sentiments parfaitement dévoués.

Marc Bloch

P. S. Nous recevons à l'instant la carte ci-jointe en réponse à une demande que nous avions adressé à la Yale University Press, mais que celle-ci a fait suivre à son dépositaire européen Humphrey Milford. Or la maison Humphrey Milford est la seule grande maison d'édition qui

jusqu'ici ait témoigné envers nous d'une extrême mauvaise volonté: alors que nous recevons toutes les publications de Cambridge, Oxford, étant représenté par Milford, ne nous envoie rien (j'ai protesté récemment à Oxford même). Il nous serait désagréable de penser que l'Université de Yale, qui certainement n'est point mal disposée envers nous, doive ne jamais voir ses publications signalées dans notre revue, à cause de ses relations commerciales avec Milford. Puis-je vous demander de vous assurer s'il ne serait pas possible que l'envoi nous fût fait directement depuis New-Haven? Nous en serions infiniment heureux.

**Letter 6 : Asakawa to Bloch 1931.1.8 (Colmar, LP, typed script; a copy in Yale, Box 3, Folder 27, typed script)**

January 8, 1931

Professor Marc Bloch,  
Annales d'Histoire Économique et Sociale,  
Palais de l'Université,  
Strasbourg, France.

My dear colleague:

I thank you sincerely for your handsome letter of December 5. I shall first answer your letter in detail in the same order as you have mentioned.

1. In order to aid you in writing for books and magazines to publishers or authors in Japan, so that their works might be sent direct to me, I shall supply you with titles in Japanese characters to go to them with your request. Every work that I shall receive from them I shall take note and report to you. I shall in other ways try to facilitate your asking for works as far as I can.

2. As you suggest, I shall take pleasure in writing letters personally to such authors and publishers whom I know. I shall also consult some of my friends in Japan as to the best way of keeping us informed of recent publications and making approaches to publishers and authors.

3. I shall try to review worthy books and articles which have appeared within the last four or five years.

4. I accept your suggestions as to the limits of works to be covered in our reviews, excluding works on purely political history or purely judicial subjects. As you intimate, I think the sphere could be gradually settled by mutual adjustment between you and me as a result of our cor-

respondence.

5. As for works on contemporary Japanese economics, I shall ask Professor Ichihashi of Leland Stanford University, California, if he would be willing to review works of this character for us. He is professor of economics and of Japanese history, and is, I think, quite competent to do this kind of work. If he intimates that he is willing to do this work, I shall let you know, and you might write direct to him.

I have at once written to the Yale University Press about your complaint of Milford, and have received the enclosed letter in reply. I hope now the arrangement that has been made by the Press seems satisfactory to you.

It is a matter of great gratification to me that of all the scholarly journals in this country and in Europe, your *Annales* is the only one which is willing to take notice of works that appear in the Japanese language, and I take special pleasure in participating in your very useful undertaking.

I have only recently discovered in your *Annales* your notice of my two articles, and was very much flattered to receive such an extended attention from you on so humble pieces of work. I was particularly pleased with the suggestions that you made.

I am sending you herewith my reviews of a few recent works of note. If they appear to be too long, I beg of you to curtail them as much as you desire. It is not possible for me at this distance to judge how long my reviews should be. Would it not be well for you to indicate the approximate amount of space that I might use for each quarter of the year? Then I should be able to adjust the length of my articles to proper dimensions. I have not included articles in magazines in my reviews, but these will follow later.

Very sincerely yours,  
K. Asakawa

P. S.

The books of which I am sending you the reviews are in my own collection. I have a few more books, and also journals, which I shall review later. K. A.

**Letter 7 : Bloch to Asakawa 1931.1.23 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

Strasbourg, le 23.1. [19]31

朝河貫一とマルク・ブロックの往復書簡（向井・斎藤・佐藤）

Mon cher collègue,

Je tiens à vous remercier sans tarder de vos comptes-rendus. Ils me paraissent excellents dans le fonds comme dans la forme et intéresseront très vivement nos lecteurs. Leur dimension est tout à fait conforme à nos habitudes. À ce propos, laissez-moi vous dire qu'il nous serait bien difficile de vous fixer d'avance sur la place dont vous pourrez disposer chaque année ou dans chaque numéro. Nous avons toujours tenu à conserver à la partie bibliographique de la revue une grande souplesse. Il y a des livres, qu'il pourra vous suffire d'indiquer en quelques lignes, d'autres — parfois en eux mêmes plus courts — exigeront un compte-rendu plus important; pour d'autres enfin vous pourrez estimer utile de consacrer une véritable note, de plusieurs pages, telle que celles que nous publions dans la section «Questions de faits et de méthode»; nous ne verrions que des avantages à recevoir de vous le moment venu une ou deux notes de ce type, si les problèmes envisagés en valent la peine. De toutes façons, vous êtes seul juge de la longueur nécessaire au compte rendu et nous vous faisons toute confiance, — sachant bien d'ailleurs que vous ne vous froisserez pas si un jour, faute de place suffisante dans le numéro, les directeurs sont contraints, à leur corps défendant, de donner quelques coups de ciseaux dans votre texte, ils le feront toujours, soyez en assuré, très discrètement. Aussi bien, est-il évident que les comptes-rendus de livres écrits en une langue que l'immense majorité de nos lecteurs est malheureusement incapable de comprendre exigent une analyse de l'ouvrage un peu plus poussée que s'il s'agissait d'un livre accessible à tous.

Naturellement nous varions quelque peu les rubriques des courriers critiques de numéro à numéro. Les mêmes pays ne figurent pas dans tous les numéros, ni les mêmes têtes de chapitre (Économie urbaine, Commerce etc). Là encore, quelque souplesse est nécessaire. Envoyez-nous les comptes-rendus une fois écrits, nous les ferons imprimer tout de suite, puis les grouperons dans les numéros selon les nécessités du moment. Nous vous serons infiniment reconnaissants si vous pouvez obtenir la collaboration du Professeur Ichihashi. Votre recommandation est la meilleure des garanties.

Merci beaucoup pour votre intervention auprès de la Yale University

Press. Elle a été des plus efficaces. Si vous avez l'occasion de rencontrer les directeurs, vous nous ferez plaisir en leur transmettant nos remerciements.

Nous serons très heureux de recevoir de vous les autres comptes-rendus que vous voulez bien nous promettre, ainsi que les demandes de livres. Je ne veux pas vous fatiguer d'inutiles répétitions: vous savez combien nous vous sommes reconnaissants de votre si précieuse collaboration.

Veuillez, mon cher collègue, accepter l'expression de mon cordial dévouement.

Marc Bloch

**Letter 8 : Asakawa to Bloch 1931.2.8 (Colmar, LP, manuscript)**

8 Feb. 1931

My Dear Colleague,

Many thanks for your kind letter of January 23. I am much gratified that the reviews which I sent you meet with your approval.

I understand well the conditions regarding reviews of which you have written me, and will do my best to conform to them. I appreciate your policy of having considerable elasticity of arrangement of material in the Annales.

I shall send you other reviews and the names of books and periodicals which will be useful for our purpose. But I have not yet had the time to prepare them.

I have already asked scholars in Japan to recommend the best journals and books, and consulted them as to the best method of securing books and journals.

I have also asked Professor Yamato Ichihashi, of Stanford University, Stanford University [*sic*], California, and Professor Yasaka Takaki, Imperial University, Tokyo, Japan, as to whether they would be willing to send you notices on books or articles on modern Japan; — the former in the economic field, and the latter in the social. Both men are good scholars and write English well.

I have not heard from Takaki yet; there has not elapsed enough time for me to hear. Ichihashi writes me that he has very little time that he can use for this purpose, but will be pleased to send you reviews in the

field suggested. I have given him the necessary directions, and hope to see that we shall arrange matters satisfactorily between us there. I have suggested to him to send you brief reviews of one or two books soon. If you will kindly write him when you receive from him his first reviews, I have no doubt that he will feel much honored.

In writing reviews for you, there is one thing about which I feel somewhat ill at ease. It is that the authors whose books we receive and review might not have an opportunity to see the reviews when they were published in the Annales, for the Annales would not be procurable in Japan. On the other hand, it would be too much to ask the editors of the Annales to send to the authors copies of the number in which their works are noticed. They would naturally be interested and encouraged to see their works noticed in a European journal of so high a standing. Can you suggest any way of gratifying them?

Always faithfully yours,  
K. Asakawa.

**Letter 9 : Asakawa to Bloch 1931.3.28 (Colmar, LP, manuscript)**

28 March 1931

Dear Colleague,

In returning the proof of my forthcoming reviews in the Annales, I wish also to thank you for your kind letter of February 17th.

I am pleased to know that the Librairie Armand Colin will send reprints of reviews to the editors (publishers) of the books or journals reviewed. May I suggest that, in regard to the reviews of Japanese works, their reprints be sent to the reviewer (in the present instance, to me), and I send them to the authors from me, instead of Armand Colin sending the reprints to their publishers? The reason for this suggested change of method is that A.C. may not always know the addresses of the publishers, without my specially letting him know them in a full form; it is a fact that a Japanese address is sometimes wrong, and the writing of unfamiliar proper names is liable to contain errors. Moreover, if you would adopt my suggestion, the authors would be assured to receive copies of the reviews of their works.

When Ichihashi or Takaki begins to send you reviews, the same method might be applied to his reviews: the reprints may be sent to him, and

he will forward them to the authors.

I note with pleasure that the two reviews set in type are complete translations of my English texts. And it is delightful to see how carefully the translations have been done. But, may I repeat what I said before, that you are at perfect liberty to do anything you like with my reviews – to abridge them or to suppress them altogether. I cannot judge how much space may be available, and may not always hit upon the right manner of reviewing. A complete editorial control on your part will be necessary, as I can well see.

I regret that I have not had any time to send you more reviews, but I assure you that I never forget the matter and that I carefully lay aside books and articles which I may review when I find the time.

Always very sincerely yours,  
K. Asakawa.

**Letter 10 : Asakawa to Bloch 1932.7.15 (Colmar, LP, manuscript)**

I have read with great interest your article on Feudalism in the Encyclopedia of the Soc. Sciences.

15 July 1932

Dear Colleague,

I humbly beg your pardon for my long neglect in sending you reviews of Japanese works. I have read many things with the intention of reviewing them for you; during last summer I read several large volumes for this purpose, and during the last twelve months I have added many more. But, unfortunately, it has been difficult to find any time to write reviews. The result is that many of the things I have read remain unreviewed. Now, I have gathered together several of my readings that all touch on religion, and reviewed them in the article which I enclose herewith. I hope that you will find the subject interesting, even if my review is poor, and that, at the same time, you will forgive my long silence. My work for the University absorbs all my time.

If you should find the enclosed article acceptable for the Annales, I beg you to have the publisher make reprints of it, so that I might send copies to the fifteen authors whose books are commented upon in the article, and also give copies to some of my own friends. I shall gladly pay



for the reprints, if the publisher will let me know the cost.

I suggested to you some time ago that the best way to send reprints to Japanese authors whose works I reviewed would be for the publishers to send me the reprints, and for me to send them to the authors. The reason is that it would be difficult for the publisher to address correctly the editors of the works reviewed. I can do so much more easily.

But your publisher did not send me reprints of my last contribution to the *Annales*, and I am afraid that Takekoshi, Takikawa, and Miura, do not know how their works have been reviewed. I naturally desire that the authors should know the reviews when they are printed. The *Annales* are not easily accessible to them.

Mr. Ichihashi, of Leland Stanford University, agreed to review books for you, but I doubt that he has done so. I have asked several friends in Tokyo to write reviews for you, but some have declined and others even have not answered my letters. I can easily understand that hardly any one has the time to write what would bring no compensation, or has a sufficient knowledge of French or English to write. I even suggested to them that they might write in Japanese and I would translate, but they apparently have no time even for that. I am much distressed that my effort to interest them has been futile. But I can assure you that those who have answered me all thought that it would be an honor to contribute to the *Annales*, but that they were unfortunately unable to do so.

With sincere regards,  
K. Asakawa.

**Letter 11 : Asakawa to Bloch 1932.7.24 (Colmar, LP, manuscript)**

24 July 1932

Professor Marc Bloch,  
Strassbourg [*sic*].

Dear Sir,

I have received from the Annales the following book for reviewing: —  
Andréadès. *Les finances de l'empire japonais et leur évolution*.

Previously I also received: —

K. Miyashita. *Beiträge zur japanischen Geldgeschichte*.

I shall review them when I can, but it is difficult to say when I may be able to do so. Of the two books, the second somewhat interests me, but

Andréadès' book falls beyond my field of interest. Nevertheless, I shall retain it, with the hope to comment on it some time, if you can allow me time.

I would suggest that, hereafter, you do not send me books which have to do with the present Japan, or which require understanding of technical aspects of economics. I neither have sufficient knowledge nor have the time to study and review them.

It is not that I object to reviewing works written in European languages. I should be glad to see them if they fall within any proper sphere. But works of the kinds which I have mentioned may be avoided, no matter in what language they are written.

Wishing you a pleasant summer. I am always  
very sincerely yours  
K. Asakawa.

**Letter 12 : Bloch to Asakawa 1932.8.1 (Fukushima, AS, E37-1, manuscript)**

Fougères, comm. Bourg d'Hem  
par Bonnat, Creuse  
le 1<sup>er</sup> août [19]32.

Mon cher collègue,

Je suis plus en retard que je n'eusse voulu pour vous remercier de votre précieux envoi. La faute en est aux vacances qui ralentissent les courriers et dispersent, aux quatre coins de l'horizon, le personnel d'une revue. Nous avons lu, Lucien Febvre et moi, votre article avec le plus vif intérêt, et nous vous sommes bien reconnaissants de nous l'avoir donné. Nous le publierons aussitôt que possible. Pour l'instant nous allons le faire traduire. Comme la place est, dans la revue, très strictement mesurée, peut-être nous permettons-nous, au cours de la traduction, d'abrégé très légèrement certains passages, sans, bien entendu, toucher en rien au fonds. Aussi bien, vous resterez juge, en dernier ressort. Car je prendrai la liberté de vous soumettre le manuscrit dactylographié de la traduction, dès qu'il sera exécuté. Ainsi, si votre pensée se trouvait en quelque façon trahie, vous pourriez nous indiquer les corrections nécessaires; et par là même nous éviterons les modifications sur épreuve, que notre éditeur a de bonnes raisons pour redouter. Merci encore de nous

aider à faire mieux connaître à nos lecteurs, dans ses profondeurs, votre passionnante histoire nationale.

Vous aurez droit, sans la moindre difficulté et sans la moindre charge pour vous, à 25 extraits de votre article. Si ce nombre ne vous paraît pas suffisant, veuillez, je vous prie, nous le dire; et nous vous commanderons la quantité voulue d'extraits supplémentaires. J'espère que ce sera sans frais pour vous, mais cela dépend de l'éditeur, au nom duquel je ne puis m'engager. Les 25 extraits gratuits, au contraire, sont de règle pour tout travail d'une certaine ampleur, et le votre est incontestablement dans ce cas.

Pour les comptes rendus isolés — partie «Courrier critique» alors que votre présent article se rangera sans doute sous la rubrique «Problèmes d'ensemble» — pour des comptes rendus par conséquent tels qu'étaient ceux que vous avez bien voulu nous fournir précédemment, nous ne fournissons pas en général d'extraits. Mais j'avais indiqué à l'éditeur les raisons qui vous faisaient souhaiter d'en recevoir, dans l'intérêt même des Annales; il m'avait dit qu'il trouvait commode — et préférable du point de vue de la publicité — de vous envoyer purement et simplement quelques exemplaires du numéro de la revue, où vos comptes rendus avaient paru; vous n'auriez eu qu'à les adresser aux auteurs intéressés. Je crains bien, d'après votre lettre, que l'envoi n'ait été omis. Je verrais, à la prochaine occasion, s'il est possible de réparer cet oubli.

Nous vous sommes bien reconnaissants de vous préoccuper de nous trouver des collaborateurs. Je sais par expérience combien cette «queste», pour parler comme nos vieux poètes médiévaux, est difficile. Mais je suis persuadé que vos aimables efforts finissent par être couronnés de succès. Du moins avons-nous votre propre collaboration, qui nous est infiniment précieuse. N'aurez-vous pas un jour un véritable article à nous donner, un article à large portée comparative, comme vous sauriez si bien l'écrire? Nous le publierons avec un très vif plaisir. Je n'ignore pas que vos cours vous prennent beaucoup de temps. Mais dans ces cours même vous trouverez peut-être la matière d'un article. J'espère ne pas être trop indiscret en vous demandant d'y songer.

Veuillez, mon cher collègue, accepter, avec nos très sincères remerciements, l'expression de mes sentiments tout cordialement dévoués.

Marc Bloch

**Letter 13 : Asakawa to Bloch 1932.8.14 (Colmar, LP, manuscript)**

14 August 1932

史苑  
(第七六卷第二号)

My dear Colleague,

I have received your very amiable letter of August 1. I fear that my previous letter had pursued you to your retrait during the vacation and disturbed your calm. And I thank you most sincerely for the minute care which you have taken about the various points concerning my contributions to the review.

I am also spending a month on a farm in New Hampshire, in the foothills of White Mountains. I have brought with me some material for work, and so am not idle. But it is delightful to run away from the noise and dust of a city into the pure mountain air of the north. On this farm, I am reading before breakfast your extremely interesting *Caractères* [*sic*] originaux, which you kindly sent me and which I have not perused for too long a time. I am deriving much information of capital value from your book, for which I am very grateful. I shall eventually write a review for a good Japanese journal.

All that you propose regarding the translation of my article and reprints and copies of the *Annales* is perfectly satisfying to me. I feared that my article would be found too long. Of course, you may delete whatever you wish. On seeing the translation, I shall, as you suggest, make whatever corrections seem necessary, so as to avoid making changes in the proofs. I realize that space in the review is limited, and beg you to choose your own time to publish the article, if you judge it deserving a place.

25 reprints of the article would be quite sufficient. And it seems to me a good idea to send a complete *exemplaire* of the *Annales* to each author of the works contained in my reviews in “*Courrier critique*”. That would make the *Annales* better known in Japan, though I could hardly expect that that would win for its publishers many fresh subscribers. There might possibly be some result to that effect, I should hope.

You honor me greatly by suggesting that I write an article for your review from the comparative point of view. Problems from that standpoint continually occur to my mind, though I unfortunately lack the leisure to pursue that to the end. On some of them, I should be happy to write articles. But I should fear that they, from their nature, might not be always suitable for the *Annales*. The chief reason for this fear is that my own primary interest is not economic, but institutional, specially on

the side that touches public law and political régime. I conceive that the word “Sociale” in the title of your review is subordinated to “économique”, n’est-ce pas? I fear, in short, that my interest does not much coincide even with your “social” sphere. Institutional problems such as interest me naturally touch many phases of economic and social history; and this is especially true with feudal institutions, as they necessarily combine questions of both public and private life. Nevertheless, the emphasis is different. Articles of more purely institutional import — would these interest the Annales? I beg you to tell me frankly what you think on this hand.

For example, I am for the moment deeply interested in the question how Yoritomo founded the shogunate in the late twelfth century. He was the first shogun; and his shogunate, established during his extraordinary life, set the precedent which was followed for seven centuries, and which came to control during that period all phases of the social life of the nation. Therefore the problem concerning Yoritomo is one of capital importance in the entire history of the Japanese nation; and the problem has not been treated institutionally by Japanese scholars as yet. It is a difficult problem in many ways, and its many-sided aspects could not be treated except with a comparative knowledge. All the reasons for the difference of Japanese feudalism from the European are implied in the very first régime founded by Yoritomo. But this problem can, I think, only be treated to any degree of satisfaction from the institutional point of view.

I hope, Sir, that you will enjoy your vacation to the fullest extent, and will return to the University with an added lease of energy.

Always very sincerely yours,  
K. Asakawa.

**Letter 14 : Bloch to Asakawa 1932.9.24 (Fukushima, AS, E37-2, manuscript)**

Fougères, le 24 sept. 1932.

Monsieur et cher collègue,

Veillez, je vous prie, m’excuser si je n’ai pas répondu plus tôt à votre dernière lettre. J’ai voulu consulter mon ami Lucien Febvre, et les vacances ont, comme à l’ordinaire, mis entre nous une distance assez forte.

Le sujet de votre article sur le Shogounat est — du point de vue même de l'histoire comparée — d'un intérêt extrêmement vif; traité par vous, il ne saurait que suggérer une foule d'idées et ces rapprochements féconds. Je souhaiterais vivement qu'il parût dans une revue française, — parce que je suis très préoccupé d'assurer à nos historiens, et en particulier à nos jeunes historiens, la possibilité d'une culture plus large que la routine habituelle. Mais il faut maintenir entre les diverses revues un rudiment de spécialisation. Pour les Annales, le sujet est trop juridique et, si j'ose aussi parler, «institutionnel»; à la fois notre public et les directeurs des autres revues auraient le droit de s'étonner. Il n'y a heureusement pas que les Annales. Mon ami Febvre est également depuis l'an dernier co-directeur de la Revue de Synthèse, anciennement «Revue de Synthèse historique». Vous connaissez certainement ce périodique; malgré certaines inégalités, qui disparaîtront de plus en plus, il rend, à mon sens, les plus grands services et j'y ai personnellement souvent publié. Il a été fondé et est encore, pour partie, dirigé par M. Henri Berr, à qui nous devons, entre beaucoup d'initiatives heureuses, la fondation, aussi, de cette grande collection: «L'Évolution de l'Humanité». Febvre m'a prié de vous dire que, si vous vouliez bien lui confier votre article, il l'accueillerait avec beaucoup de reconnaissance. Je souhaite, pour ma part, que cette proposition vous agréée; et je me permets de la recommander à votre attention.

Je dois toutefois vous signaler que les prochains numéros de la Revue de Synthèse sont d'ores et déjà assez remplis. Et nous ne voudrions pas que votre article risquait d'être pas trop retardé. Mais si, une fois rédigé, il ne devait pas y avoir de place pour lui dans la Revue de Synthèse avant un délai que vous jugeriez trop long, d'autres possibilités, également intéressantes, s'ouvriraient devant lui. Je suis persuadé que soit la Revue Historique, soit la Revue Historique au [sic] Droit l'accueilliraient avec plaisir. Sans doute, je ne suis, dans l'un et l'autre de ces périodiques, qu'un collaborateur, sans participation aucune à la direction. Je suis en assez bons termes cependant avec les directeurs pour pouvoir, à l'occasion, me faire auprès d'eux votre interprète — si tant est que vous en ayez besoin —; et je pense qu'ils ne refuseraient pas de m'entendre.

En un mot, si, une fois votre article écrit, vous acceptez de me l'envoyer, je crois pouvoir vous affirmer que rien ne serait plus aisé que de lui trouver accueil — et un accueil reconnaissant — dans une de nos grandes revues. J'espère que vous ne jugerez pas ma proposition trop indiscreète. Vous saurez n'y voir, j'en suis sûr, que la manifestation du désir où je suis de réserver pour nous la première d'un travail si capable d'ouvrir à

nos historiens des vues nouvelles.

Je serai de retour à Strasbourg le 1<sup>er</sup> octobre, après des vacances paisibles, que n'ont pas été tout à fait aussi laborieuse que je les eusse souhaités. Puis-je, en terminant, vous répéter combien je serais heureux de vous accueillir, un jour, en France et à Strasbourg?

Veillez, Monsieur et cher collègue, accepter l'expression de mon parfait dévouement.

Marc Bloch

**Letter 15 : Bloch to Asakawa 1932.11.4 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

Strasbourg, le 4 nov. [19]32

Mon cher collègue,

Veillez, je vous prie, trouver ci-joint la traduction de votre très intéressant article. J'espère que nous n'avons pas trop trahi votre pensée. Mais je vous demande de revoir ce texte avec le plus grand soin. Inutile d'attirer votre attention sur les questions purement graphiques; notre ignorance de la langue japonaise me fait toujours redouter les plus fâcheuses erreurs. Mais, sur le fond même, des contresens sont toujours possibles. Je vous serais reconnaissant de m'indiquer vos rectifications sur une feuille à part. À propos d'un ou deux passages, j'ai signalé au crayon un doute — une omission bibliographique — ou la nécessité, pour un lecteur européen, d'une date supplémentaire. Enfin j'aurais un complément de quelques lignes à vous demander. Pour certains lecteurs, je le crains, encore plus tristement ignorants que moi, des réalités de l'histoire japonaise, la distinction du shintō et du bouddhisme paraîtra peut-être assez peu claire. Lacune énorme dans leurs connaissances, et que je suis le premier à déplorer; notre enseignement, à mon sens, souffre à cet égard de graves défauts; mais lacune dont, précisément parce que nous tenons à faire l'éducation de notre public, il est de notre devoir de tenir compte. Ne pourrez-vous, soit en note, soit (et mieux encore) dans des quelques lignes d'introduction, préciser pour eux ce point et guider leur cécité? Bien entendu, deux ou trois phrases suffisent.

De même, je me demande s'il ne conviendrait pas de rappeler — en note, cette fois, certainement — la suite chronologique et les caractères tout à fait essentiels des périodes de l'histoire japonaise: pré-féodale,

âges féodaux divers, — avec quelques dates points de repère (introduction du bouddhisme, de la culture chinoise, dates de l'établissement du shogounat, de la grande guerre civile du XV<sup>e</sup> siècle). Je suis honteux de vous réduire à mettre par écrit des données aussi élémentaires; plus dignes d'un auteur de manuel scolaire que d'un historien de votre trempe. Mais vous saurez comprendre notre sentiment. L'œuvre à laquelle vous voulez bien nous aider est d'élargissement intellectuel; il ne faudrait pas que, faute de rappeler quelques notions de base, elle se trouvait compromise. En lisant des ouvrages de vulgarisation, dans le domaine des sciences exactes, j'ai fréquemment eu l'impression que, si l'auteur avait pris la peine de rappeler en deux mots certaines définitions tout scolaires, que j'ai souvent apprises jadis mais, souvent aussi, oubliées, le profit tiré du livre s'en serait trouvé pour moi considérablement augmenté. La même règle, je crois, doit à l'occasion, être appliquée à nos études.

Laissez-moi vous dire en terminant, combien votre article nous a fait plaisir. Je parle au nom de Lucien Febvre comme au mien. Il paraîtra dans la rubrique «Problèmes d'ensemble». Merci mille fois.

Je serai heureux de ravoir votre manuscrit, rectifié et complété, le plus tôt qu'il vous sera possible. Nous tenons beaucoup à en activer la publication.

Veillez, mon cher collègue, accepter l'expression de mes sentiments tout cordialement dévoués.

Marc Bloch

**Letter 16 : Asakawa to Bloch 1932.11.20 (Colmar, LP, manuscript)**

20 Nov. 1932

My dear Colleague,

Herewith you will find my corrections and suggestions regarding the admirable translation of my article. I have also supplied such data as you desire. I concur with you completely as to the need of furnishing the reader with guiding data, in view of the obvious fact that he can not be supposed to be familiar with the history of so outlying a land as Japan.

I have indicated a few points in the pages of the translation in red pencil. But I have written other points down in separate sheets, and showed by means of Arabic numerals in red pencil where these sugges-



tions apply in the text.

All the additional matter has been suggested as notes, but only one thing, that of Shinto and Buddhism I have desired as insertion in the text on page 1.

The spelling of the proper names and native words is all correct. The only question is whether such words as shogun should be written in this form or in the French fashion, shogoun; I note that in the translation both forms occur. I have no personal preference, and beg you to choose either form and give uniformity to the spelling of the same word. Other native words not current in French literature on Japan are spelled in my article in the English forms, not French: the vowel u, when short, is like the French ou, and only lengthened when marked with - (ü). Whether this should also be changed to ou is a question which I prefer to leave to your decision. The word shinto is sometimes written in French books as shinnto, no doubt in order to avoid the natural wrong pronunciation of the English form by French readers as “chin-to”. Whether you would add the second n for the same purpose should depend on you.

I am heartily sorry that I do not write in French, and so cause you so much trouble. I note that you have taken extraordinary pains about my contribution, and I am extremely grateful to you for them.

I beg you to forgive me for the long delay in answering your very kind letter from Fougères dated 24 Sept., in regard to my article on the founding of the shogunate. I can hardly thank you sufficiently for the careful consideration you had given to this matter, for consulting M. Lucien Febvre, and forgiving me your own valuable suggestions.

The situation with my article is peculiar. As I wrote you in my last letter, the first part of the article has been set in type by the *Seminarium Kondakovianum*, of Prague, but will not be published till 1933. And while the remainder of the article is not yet written, the editors of the journal feel uncertain whether, after suspending its publication for the present by reason of financial difficulties, they would be able to resume its publication later, and when. Nor do they know, if they should be able to recommence the journal, how often they would print it, and whether they would have space for the rest of my work. It is not clear whether I am morally obliged to give them the remaining part of the article for possible publication. The question is a little delicate.

In the meantime, my conditions are such that I shall have little time at present to write the unfinished part. It will probably be a long time before I can attempt it, as I am under obligation to write a larger work on another subject. In the meantime, the situation at Prague will be

somewhat clearer, and I shall be in a position to decide what disposition I may make of the article when it is finished.

At all events, it is not unlikely that the test of my article will be longer than the first section already set in type. The whole, therefore, when completely written, will be too long for publication in a single number of any journal.

At any rate, I should wait till circumstances are clearer both at Prague and with me. According to the developments, I might possibly consult you again some time in the future, when the work is completed. In the meantime, I wish to thank you most cordially for the kindness which you have shown me in this and all other matters. I am also grateful to Professor Febvre for the thought which he has given me on more than one occasion.

I hope, my dear Sir, that your valuable work is progressing to your own satisfaction, and that you do not find it too exacting upon your health.

Always very sincerely yours,  
K. Asakawa.

**Letter 17 : Bloch to Asakawa 1934.11.23 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, typed script)**

59 Allée de la Robertsau,  
Strasbourg,  
23 Novembre, 1934

Monsieur et cher collègue,

Une des plus importantes maisons d'édition française m'a prié de prendre la direction d'une collection d'ouvrages relatifs à la vie paysanne. La chose n'est encore qu'en projet. Mais je suis déjà en mesure de préciser quelques points, à mon sens essentiels. Il s'agirait de volumes in octavo, d'environ 350 à 400 pages chacun. Cartes et illustrations, si besoin est. Assez peu de notes au bas des pages. — pour les références aux documents cités seulement. En revanche, à la fin de chaque volume, de 10 à 15 pages d'orientation sur les sources et la bibliographie. Le public que l'on voudrait atteindre est un public d'hommes cultivés, capables de s'intéresser à des études sérieuses, pourvu qu'elles soient présentées avec toute la largeur d'esprit nécessaire. Je crois que l'éditeur

offrirait une rémunération raisonnable, dans l'ordre de 10 % par volume vendu (le prix de vente de chaque volume s'établirait autour de 15 à 30 fr.). Naturellement, une somme serait versée d'avance dès l'impression.... Et maintenant, vous devinez bien, sans être sorcier, mon cher collègue, pour quelle raison je vous ai ennuyé de tous ces détails. C'est que je serais extrêmement heureux d'avoir de vous un «paysan japonais»: au point que cette lettre est la première que j'écris.

Il va de soi qu'en parlant de paysan japonais, j'ai bien conscience de me borner à une indication très sommaire. Ce sera à vous de me dire si vous jugez bon de limiter davantage le sujet, tout en lui conservant la largeur indispensable à une pareille collection. Ce dont je rêve, c'est d'un volume où seraient retracées, à travers toute l'histoire du Japon, les destinées de la population paysanne, où serait mis à jour le substrat rural profond de la civilisation japonaise, où cette évolution serait éclairée par les comparaisons nécessaires avec l'évolution européenne, où enfin les liens des réalités paysannes, avec leur expression dans l'art et la littérature, seraient clairement exposés.

Ce livre, je crois bien, seul vous pouvez l'écrire. L'essentiel, pour moi présentement, est que vous acceptiez le principe. Il sera temps, ensuite, de parler de détails de plan et de délais.

Naturellement vous n'auriez qu'à écrire en Anglais; la Maison se chargerait de faire traduire, sous votre surveillance et la mienne.

Au cas où vous ne croiriez pas pouvoir vous-même vous charger de l'ouvrage, toute suggestion de votre part, relative à un autre collaborateur possible, serait naturellement la bienvenue. Beaucoup moins bienvenue cependant que votre acceptation. C'est à votre collaboration que je tiens, par ce que je sais ce dont vous êtes capable; et je suis sûr que vous sentirez comme moi le grand intérêt qu'il y aurait à permettre aux lecteurs français et européens, de pénétrer plus avant, par cette voie dans l'intimité de votre pays.

Laissez-moi espérer une bonne réponse, et veuillez agréer, Monsieur et cher collègue, l'expression de mon parfait dévouement.

Marc Bloch

Professeur à l'université de Strasbourg

Il va de soi que nous comptons toujours sur votre aide pour les Annales.

**Letter 18 : Asakawa to Bloch 1934.12.10 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

10 December, 1934.

Professor Marc Bloch,  
59 Allée de la Robertsens [*sic*],  
Strasbourg, France.

Dear Professor Bloch,

I am much touched by your considering me as capable of cooperating with you by writing a volume in your contemplated series.

It is highly desirable that the history of Japanese agrarian life should be reconsidered as a whole in reference to the evolution of the larger life of the nation and also in comparison with European developments. And you know well that the subject happens to be one of my secondary interests. If my condition permitted, I should regard it as a signal honor to try my poor hand at writing such a book as you suggested. But there are difficulties.

To say nothing of the need of my studying and thinking much if I should make an attempt to write, the greatest difficulty is my want of time. I am under an obligation to write a volume of Japanese feudal institutions, the promise for which was made so long ago as 1919, but which I have as yet barely begun to write. There is vastly more investigation of texts that I have to do, before I can proceed further. Unfortunately, I have very little time for investigation while the university is in session, and the vacations hardly give me sufficient time for much accomplishment. I feel that, before I come to the point where the writing of this volume can go on smoothly, it would not be just for me to undertake another large piece of writing.

It is for the same reason, dear colleague, that I have been unable to contribute more often to your Annales.

I am, however, reluctant to decline positively to accept the invitation which you have so cordially extended to me, before I ask you how much time you would be able to allot me for the writing of this book.

I should also wish to know how large a part of the volume should be devoted to the present day. This part would require of me more study than the past history, which is my main interest. I rather fear that I should not be able to write the modern part with as much spirit and feeling as the earlier portions, for the reason that my chief interest in this whole subject has been in the close relation which the peasant life

had with the general institutional life of the past. In the present ages, the growth of industrial and commercial life has [*sic*] come to share the larger part of that relation. Otherwise, the farmer's life in Japan is now exceedingly gloomy, and cannot command the enthusiasm of any one who may be obliged to write about it.

Always very sincerely yours,

**Letter 19 : Bloch to Asakawa 1934.12.25 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, typed script)**

59 Allée de la Robertsau - Strasbourg,  
25 Décembre, 1934

Monsieur et cher collègue,

Votre lettre m'a fait grand plaisir, en me montrant qu'en principe nous pouvons compter sur votre collaboration. Les difficultés que vous soulevez avec tant de franchise ne me paraissent pas bien graves.

C'est à vous, naturellement, qu'il appartiendra de réfléchir sur le plan du volume et, le moment venu, si vous le voulez bien, de me préciser, à cet égard, vos intentions, pour que nous puissions en causer — par lettres malheureusement —. Je conçois très bien, un volume de caractère surtout historique, ou vous mettriez la vie paysanne japonaise en rapport avec l'évolution générale de la civilisation de votre pays. Comme c'est tout d'abord par son art — et quel art! — que le Japon a été connu chez nous, il serait intéressant d'illustrer assez copieusement l'ouvrage non pas seulement pour le plaisir des yeux, mais afin de faire bien sentir comment l'image et la réalité, s'éclairent l'une l'autre. Le présent, ou plus exactement, si vous voulez, le Japon de l'ère capitaliste, pourrait très bien n'apparaître que dans quelques page de conclusion, un peu, si j'ose citer cet exemple, comme je l'ai fait moi-même dans ces Caractères Originaux de l'Histoire Rurale Française. Voilà, je pense, de quoi faire taire vos scrupules.

Quant aux délais, pourriez-vous m'indiquer le temps qui, approximativement, vous semblerait nécessaire. J'insiste sur «approximativement»; car je sais mieux que personne qu'une précision parfaite est impossible. Mais un ordre de grandeur me permettra d'en causer avec l'éditeur.

N'oubliez pas que notre collection qui, j'espère bien verra le jour, n'est encore qu'en projet. À titre d'exemple, je puis vous dire qu'un des vo-

lumes auquel je tenais le plus et qui m'est promis, très fermement doit être terminé dans deux ans. Je suis bien persuadé, en tout cas, que cette question de date ne soulèvera aucune difficulté. L'essentiel est que vous nous donniez le volume.

J'attends, avec beaucoup d'impatience, votre ouvrage sur la Féodalité Japonaise. Que vous nous apprendrez de choses nouvelles et suggestives!

Merci encore une fois, mon cher collègue, pour votre bonne lettre; répondez-moi, je vous prie, au sujet de la date, et veuillez agréer, avec mes meilleurs vœux de bonne année, l'expression de mes sentiments les plus sincèrement dévoués.

Marc Bloch

**Letter 20 : Asakawa to Bloch 1935.1.21 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, typed script)**

January 21, 1935.

Dear M. Bloch,

I thank you cordially for your kind letter of December 25 in reply to my letter. As I wrote you, the greatest difficulty, aside from my want of knowledge on the subject, is my want of time, Your letter offers an ample allowance on this point, but I fear that a very long time has to be allowed for the volume on feudal institutions that I should first complete before I can begin the book which you propose. That means that I must labor a long time yet before I can begin to write the first volume with any promise of steady progress, because there is still a great mass of texts to be intensively analyzed. The time I can start to prepare the book on the paysan japonais seems to be in a dim future. The earliest limit that I dare to state at this moment for this starting is four years from now, but whether the affair will actually be expedited to that extent I can hardly say as yet. With four years as the earliest limit, the latest limit cannot possibly be set. I am much afraid that this is too long a stretch of time for you to wait.

The other points are of far less difficulty. It would be possible to find some artistic illustrations which would be instructive. Nor would it be difficult to write some pages on the present capitalistic age.

The essential point is the question of time. Will you be so kind as once

again to let me know whether the conditions I have stated above would make it impracticable to include my possible contribution in your general plan? I am heartily sorry that I am so sorely preoccupied at present.

Most sincerely yours,

**Letter 21 : Bloch to Asakawa 1935.6.19 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, typed script)**

Strasbourg, le 19 Juin 1935

Monsieur et cher collègue,

Vous avez bien voulu me promettre, en principe, votre collaboration pour la Collection d'Histoire Paysanne, dont j'ai, comme vous le savez, pris la direction. Il n'est que juste que je prenne la peine de vous donner des nouvelles de l'entreprise. Elle est en très bonne voie et nos premiers volumes, qui commenceront à paraître en 1937, sont déjà assurés. Rien ne serait plus loin de ma pensée que de vous presser indiscrètement; je connais vos obligations antérieures et je n'ignore pas que vous faites déjà un véritable sacrifice en nous prêtant votre concours. Je voudrais simplement vous prier de me confirmer que nous pouvons compter sur vous; pure formalité, je l'espère bien.

Vous me ferez en même temps plaisir en m'indiquant, si vous le pouvez, et au besoin très approximativement, à quelle date vous pensez être prêt. Cela, bien entendu, sans aucun engagement de votre part et uniquement afin de me permettre de voir un peu d'avance le déroulement de la collection. Vous voudrez bien me dire aussi si je dois, dès maintenant, prier l'éditeur de vous envoyer à signer le contrat, comme il l'a fait déjà pour plusieurs auteurs dont les livres ne paraîtront pas avant quelque années, ou bien si vous préférez attendre encore.

Permettez-moi, en terminant, Monsieur et cher collègue, de vous remercier encore une fois pour l'aide précieuse que vous voulez bien me prêter et veuillez agréer, je vous prie, l'expression de mes sentiments les plus sincèrement dévoués.

Marc Bloch

**Letter 22 : Asakawa to Bloch 1935.8.18 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

18 VIII [19]35

The reason that I have been unable to answer your letter of June 19 is that I can hardly say anything more than I said in my letter to you dated Jan. 21. I said then that at least for four years I could not hope to begin to write, and that it was very uncertain that I might be ready really so soon. The situation remains the same. As for the time of finishing the writing, I should suppose that, as there would always be my little time for writing, about 2 years would have to be allowed after the commencement. This is the only point that I can add to my earlier statement.

This would make the completion of my volume come six years hence as the earliest possibility. It would therefore seem that I have once more to raise the same question with which I closed my last letter: would not such conditions make it impracticable for you to consider any participation on my part in your general plan?

Would I know your answer on this point, it seems to me, it would be useless to confirm to you, as you asked me to do in your letter of June 19, any cooperation — or to sign the publisher's contract. Only if you could accept my extremely uncertain dates, I also could say that you might well count on me, or that I would sign a contract only if it would not bind me irrevocably as to dates and as to an unconditional execution of the afterward.

Always very sincerely yours,

**Letter 23 : Bloch to Asakawa 1935.9.4 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

Fougères (Creuse)

4 sept. [19]35

Mon cher collègue,

Je vous remercie de votre aimable lettre. Je suis trop désireux d'avoir votre collaboration pour ne pas accepter vos dates. Simplement, je pense que vous serez d'accord avec moi pour estimer que la longueur du délai rend, pour l'instant, inutile tout établissement de contrat. Je compte



sur vous, je le dirai à l'éditeur, et je vous demande, dès maintenant, de bien vouloir me prévenir lorsque vous jugerez possible de vous mettre à écrire le livre. À ce moment, nous ferons intervenir les formalités commerciales d'usage. Jusque là, nous en resterons à un «gentleman's agreement», — que je vous suis infiniment reconnaissant d'avoir accepté de conclure.

Il va de soi que l'adresse inscrite sur cette lettre n'est que celle d'un séjour de vacances. Je serai de retour à Strasbourg dès octobre.

Veillez, mon cher collègue, croire à mon très sincère dévouement.

Marc Bloch

**Letter 24 : Asakawa to Bloch 1935.9.29 (Yale, AP, Box 3, Folder 29, manuscript)**

29 IX [19]35

I should have acknowledged sooner your letter of Aug. [sic] 4. I am much moved by your desiring my cooperation to the extent of accepting my conditions in spite of their extremely unsatisfactory character.

So it is, then, that we are on a “gentleman's agreement”. I shall advise you as soon as it seems to me possible to proceed to write.

**Letter 25 : Bloch to Asakawa 1939.6.19 (Fukushima, AS, E37-3, manuscript)**

Paris, le 19 juin [19]39  
17 rue de Sèvres, PARIS 6<sup>e</sup>

Monsieur et cher collègue,

Voici bien longtemps que nos Annales n'ont rien publié de vous. N'avez-vous rien à nous donner? Vous savez combien nous tenons à votre collaboration, à tout ce que vous nous apportez de précieux et par les sujets traités et par la façon même dont vous les abordez.

D'autre part, je ne désespère pas d'obtenir de vous un volume sur le paysan japonais, à travers l'histoire, pour la collection d'études rurales que je dirige à la Librairie Gallimard et dont les deux premiers volumes sont sous presse. Ne faites pas, je vous prie, mentir mon espoir.

Je pense vous faire parvenir sous peu le premier de mes deux volumes — à paraître cette année — sur la Société féodale. Je tiendrai beaucoup à avoir votre appréciation.

Veillez, Monsieur et cher collègue, acceptez l'expression de mon très sincère dévouement, — oserai-je ajouter elle aussi de mes remerciements?

Marc Bloch

（トウルーズ第二大学博士課程／東京大学大学院人文社会系研究科社会学  
研究室博士号候補生／本学文学部准教授）

## The Correspondence between Two Comparative Historians in the Interwar Period: The Unpublished Letters of Kan'ichi Asakawa and Marc Bloch with Commentary

Shinya MUKAI, Shiro SAITO, Yuki SATO

This paper introduces the letters exchanged between two comparative historians: Kan'ichi ASAKAWA (1873-1948), a pioneer of Japanese historical studies in the United States, and Marc Bloch (1886-1944), a French historian and one of the founders of the highly influential *Annales* School. Their international exchange offers an important clue to understanding how new historiographical trends were created in the interwar period. Their correspondence, which lasted from 1929 to 1939, provides invaluable information for researchers. Their 25 letters are held separately in three library collections: Paul Leuilliot Papers (LP), the municipal library of Colmar (Bibliothèque municipale de Colmar), France; Asakawa Papers (AP), Manuscripts and Archives, Yale University Library, U.S.; Asakawa Kan'ichi Shiryō (AS), Fukushima Prefectural Library, Japan. The American historian John L. Harvey has already written about the letters contained in the AP and the LP, but he failed to notice the existence of the AS letters. Therefore, the present paper will print all the letters contained in these three collections for the first time, along with notes and commentaries written in Japanese (an English version is forthcoming).

The correspondence between the two scholars consisted mainly of logistical exchanges about the *Annales* journal and Gallimard's book series, titled *Le paysan et la terre* (*The Peasant and the Land*). Only a small proportion was devoted to the academic discussion of comparative and social history. In 1929, Asakawa initiated the contact with Bloch. Having published *The Documents of Iriki* in the same year, Asakawa sought an opportunity to study abroad, and hoped that Bloch would help him arrange his research stay in France. He also made contact with the German historian Otto Hintze (1861-1940), in the hope of studying in Germany. It was exactly during this year that Bloch founded *Annales* with Lucien Febvre and launched a joint research project comprised of historians from various nations. It is from this perspective that Bloch evaluated Asakawa, whom he regarded as a cooperator for the *Annales*

project—in particular as an informant on Japanese history. Asakawa, however, tried to distance himself from Bloch. Bloch's interactions with Asakawa inspired the former to undertake a comparative study of European and Japanese feudalism in *Feudal Society* (1939-1940). Bloch's influence on Asakawa's historiography, on the other hand, remains to be explored.